

高木 元
及川季江

はじめに

江戸（時代）を代表する遊里であった吉原に関わる奇談や伝承を集大成した『烟花清談』（安永五年刊、蔦屋重三郎板）を紹介する。本書は江戸出来の読本よみほんとしては、やや特異なものであり、それゆえ研究史上でも等閑に付されてきた感がある。しかし、吉原を舞台とした洒落本や黄表紙とは一線を劃する存在であり、蔦屋重三郎がその出版活動の早い時期に出した書物であることを考えても、その研究価値は少なくない。

以下、解題は及川季江に拠り、翻刻の校訂は高木の責に帰す。

解題

『烟花清談』は吉原を舞台にした逸事や由来譚や怪談奇談などを集めた短編集である。第三巻が一番長く、一話だけで一巻を成している。取り上げられているのは、遊女だけではなく、客や遊里の関係者についての話もある。話の配列に関しては、時系列でもなく、内容的な連環をもたせながら進められているわけではない。中心と

なる第三巻に一番長い話をすえ、最終話には作者の創作と思われる話を配している以外は、とくに編集意図が存したわけではないように思われる。

序文は「よの中は山の奥こそ栖能けれ。草樹は人のとかを云ねは」という和歌で始まる和文で書かれている。読本に限らず、洒落本でも序文は漢文で書かれることが多かった。また、箔をつけるためであるが、序文は人気のある戯作者に書いてもらうということが多かったようである。

板元である蔦屋重三郎については、『近世物之本江戸作者部類』中本作者部、蔦唐丸の条に、

吉原細見ハ享保中より印行したり（中略）さるを天明のはしめ書賈畊書堂蔦重（中略）か吉原なる五十間道に在りし時（中略）その板株を購求めて板元になりしより序文ハ必四方山人に乞ふて印行しけり又朱良菅江の序したる年もありき

とあるように、年記に間違いはあるものの、蔦屋重三郎が吉原細見の板元になってからは、序文を著名な狂歌師に書かせている。四方赤良（太田南畝）や朱良菅江は蔦屋重三郎と親交があり、当時狂歌

で名をはせていた人物である。しかし、『烟花清談』では、作者と思われる葦原駿守中が自ら書いている。この葦原駿守中は管見のかぎりでは、『烟花清談』以外では見ないし、有名な戯作者の別名ということでもなさそうである。敢えて無名の作者に自序を書かせているのは何らかの理由があったはずである。

一方、冒頭の和歌は、奈良大麻寺に伝わる曼陀羅を織ったとされる伝説上の女性である中将姫が詠んだもので、継母に捨てられ、父右大臣藤原豊成と再会するまで暮らした山寺で詠まれた歌であるという。奈良県にある青蓮寺には、この歌碑がある。この歌は『当麻曼陀羅疏』『当麻寺縁起絵巻』古浄瑠璃「中将姫之御本地」謡曲「当麻」能「雲雀山」浄瑠璃「鷗山姫捨松」などには見られなかった。唯一見られたのが、『當麻寺并曼陀羅縁起』「中将法如山居之語」と『雲雀山中將法如縁起』であった。この二書は所謂「略縁起」であり、この二書を所収する『社寺縁起の研究』（一九九八年、勉誠社）の編者である梁瀬一雄氏は、「近世には神社や寺院の由来を記述したものが多く刊行された（中略）略縁起の名において古伝や口碑をまとめるという場合も少くなかったようである」と述べている。略縁起は神社や寺院が参詣者に配布して、信仰の支えになるようにという純粹なものから、寄附金を募るためや、製薬の効用を述べた宣伝用のものまで、実に種々雑多なものであったようである。つまりは、この二書も近世になって大量に印刷されたものであり、内容も何に拠って書かれたかはつきとめ難いものであった。『烟花清談』の作者がこれを参考にしたのだとしたら、「よの中は……」の歌は、古典から知識をひけらかすために引かれたのではないといえる。とすれば、形式や箔をつけるといふことに拘わらず、内容に即した和

歌を引いたものであるといえよう。

ともあれ、この和歌と中将姫とは近世の人々にはすぐに結びつくものであったのかもしれない。この和歌や中将姫の伝説からは、無常という意識が強く感じられる。遊女であった点から見れば、室町時代の泉州堺の遊女で、山賊にかどわかされて苦界に身を沈めたが、一休和尚との出会いで悟りを得、これも前世の不信心ゆえであると懺悔の心を込めて自らを「地獄」と名乗り、地獄模様の着物を羽織って仏の御名を唱えながら客を送り迎えたという伝説の地獄大夫にも通じるものがある。『烟花清談』第四卷第三話「茗荷や大岸以智防」誹事」にも、下着に白無垢を着け、打掛には白繻子に金糸で卒塔婆と骸骨の刺繍をした遊女が出てくる。この和歌からは、遊女の中にむなしさを見て、達観している作者像が浮かび上がってくるのである。

『烟花清談』には「荆棘の林」ということばが出てくる。第二卷第三話「中万字や玉菊全盛の事付」燈籠の権輿并河東追善廻向之事」四丁裏六行目に「荆棘の林に遊はず」、第三卷「山本や秋篠敵打の始末之事」十五丁表五行目「荆棘林」、同八行目「芝蘭の室ならぬ荆棘の林」である。『烟花清談』では、吉原の遊廓といった意味で使われており、第一卷第一話「山本やかつ山感」身放鳥」では、遊女勝山が、自分と鳥を重ねあわせ、さぞ「元の林に遊」びたいであろうと述べている。

「荆棘」や「荆棘の道」という語は様々な文献に見られるが、「荆棘」と「林」とが熟した用例はなく、「荆棘の林」で遊里をさすといった用例は見つからなかった。唯一「荆棘林」で用例があったのが『碧巖録』（宋の圓悟克勤による禪宗の文獻）であるが、「荆棘林」で法の

道に迷うとか、「荆棘林」を通りすぎると悟りがひらけるとか、他の文献と同じように「いばら」の意味で使われていた。

普通、遊里は「苦界」であるとか「地獄」とあらわされ、「荆棘林」で吉原の遊廓をさすのは当時も珍しかったらしく、加賀文庫本の『烟花清談』の欄外には、読者によって読み方が書き込まれている。ここからも、『烟花清談』の独特の視点を見出すことが出来る。

諸本

『烟花清談』は半紙本、五巻五冊。書名は第一～三巻の外題による。第四～五巻の外題は『奇事煙華清談』となっている。書名の訓みは、蔦屋重三郎板である安永四年（一七七五）秋の細見『籬の花』巻末広告に「ゑんかせいたん」とあり、同じく蔦屋重三郎板の安永五年（一七七六）春の細見『名華選』の巻末広告に「ゑんくわせいたん」とあることに拠る。

安永三年（一七七四）に刊行された、蔦屋重三郎板の遊女評判記『一目千本』の広告に、「名取客名取君吉原古代嘶近日出来」とある。安永五年（一七七六）に出板された吉原細見『名華選』の『烟花清談』の広告に「此書は青楼の古代の客遊女の珍らしき遊びを悉くしるし御慰に入奉り候御求御覧可被下候」とあり、内容が一致するので、これは『烟花清談』を指していると思われる。紀伊国屋文左衛門、奈良屋茂左衛門などの有名な客や、有名な遊女を扱い、昔の吉原のことを描くという『烟花清談』の内容を端的に示している。

現存する板本としては、国会図書館・京都大学・東京都立中央図書館（加賀文庫）・西尾市岩瀬文庫の所蔵本が知られている。

国会本は、第五巻の表紙を用いて一冊に合冊されている。落丁が多く、第四巻は目録と第二巻二丁、第五巻の十丁を欠いている。京大本は、第四巻の目録を欠く。加賀文庫本は早印本だと思われるが、第三巻「山本や秋篠敵打の始末之事」十五丁表の枠外に「荆棘林」ケイキョクノハヤシとの書き込みがなされている。諸本には見られない振り仮名も振られており、読者による書き込みが残されている。

以上の欠損以外、諸本に大きな違いは見られないが、第三巻「山本や秋篠敵打の始末之事」の十三丁裏・四行目冒頭が、京大本、加賀文庫本では「にはらをたて」となっており、国会本、岩瀬文庫本では「けしきをかへ」と入木されて直されている。さらに、尾題は京大本のみ「艶花清談之終」とあり、他本は「艶花」の文字が削られている。このことから京大本が初摺本であると考えられる。

先行研究

『烟花清談』は未翻刻で十分な研究も備わらないが、数人の研究者に拠る解題が存する。

○水谷不倒『選擇古書解題』（『江戸時代古書研究叢書』第五巻、一九三七年、奥川書房）「煙華清談」の項「『今昔物語』を学んだ点もあるが、又著者の追憶談とも見られる。左の二十二篇が収められてゐる（中略）大体吉原に関する奇事異聞を集めたもので、他の書に載つてゐるものがないではないが、中には新話題もある（中略）兎に角読本中特殊の作である。」

○暉峻康隆『江戸文學辭典』（一九四〇年、富山房）「青楼奇事煙華清談」の項「巷説を主とし、流行の怪談も如才なく取入れてゐる。」

吉原の怪談を扱った安永九年刊の「隣壁夜話」など本書に負ふところがある。」

○徳田武『日本古典文学大辞典』（一九八三年、岩波書店）「烟花清談」の項「五卷五冊。読本。葦原駿守中作。隣松鉢画^①。角書「青楼奇事」。安永五年（一七七六）江戸蔦屋重三郎刊。（中略）遊里の奇事雑談を述べた、全二十二話から成る短編小説集。（中略）全話すべてが「今は昔」で書き出す『宇治拾遺物語』の体裁を取っている。すべてが吉原を舞台とした異事奇聞であり、怪談も含まれるが、遊女の張りや知恵などを描いた話も多い。」

○渡辺守邦『日本古典文学大事典』（一九九八年、明治書院）「烟花清談」の項「『宇治拾遺物語』に倣って各話を「今はむかし」と書き出し、新吉原五丁に伝わる奇談、逸話を集める（中略）後世まで語り伝えられた遊女・禿・索頭或いは客にまつわる短編二二話から成る（中略）未翻刻。」

『烟花清談』は一般に（読本）として分類されているが、安永五年（一七七六）春の細見『名華選』の巻末広告に、「烟花清談 よみ本 全部五冊 / 此書は青楼の古代の客遊女の珍らしき遊びを悉くしるし御慰に入奉り候御覧可被下候」とあることから、作者や板元は（読本）として認識していたものと思われる。しかし、同じ年に刊行された前期読本『雨月物語』とは、上方板と江戸板という大きな違いがある。

収録されている記事について、水谷不倒氏以下「全二十二話から成る」としている。しかし、『烟花清談』は全二十三話からなる。水谷氏、徳田氏は全話の題名の紹介をしているが、第二巻第二話「三浦や山路か客月見の事」の題名が見られず、このために全二十二話

と勘定しているのだと思われる。この原因は想像に難くない。すなわち国会本は第二巻の二丁を欠いており、それが丁度「三浦や山路か客月見の事」の冒頭部分にあたるのである。したがって、国会本だけしか見なかった場合、この話が無いものと判断してしまう可能性が考えられる。

また、諸本の第二巻の目録では、各話の題名は頭に白丸○を付して示されているのだが、第一話の「松屋松か枝俠氣之事^{付タリ} 総角之助六事」の続きの題名であると思われる「侠客介六の實事」が二話目の白丸で示されており、第二話であるはずの「三浦や山路が客月見の事」の題名が抜けている。したがって、この目録を見て勘定すれば「全二十二話」となってしまふ。『烟花清談』の雑な造りや、諸本の落丁の多さが誤解を生じさせてしまった原因であろう。その上、水谷氏以降の執筆者は水谷氏の記述に拠ったものと考えられ、このことから水谷氏以後の『烟花清談』研究は進捗していないといえよう。

『今昔物語』や『宇治拾遺物語』の体裁に倣っていると云う点についても、『今昔物語』に関しては「今はむかし」という書き出しで始まるということからきているのだろう。『宇治拾遺物語』に関しては、『烟花清談』序文に「宇治物語の古めかしきに擬して。今昔の二字を其事の始に冠らしむ而已」とあることからきていると思われるが、『宇治拾遺物語』の序に、

世に宇治大納言物語といふ物あり。この大納言は隆国といふ人なり。西宮殿の孫、俊賢大納言の第二の男なり。年たかうなりては、暑さをわびて暇を申して、五月より八月までは平等院一

切経蔵の南泉房といふ所に籠りゐられけり。さて、宇治大納言とは聞こえけり。髻を結びわけて、をかしげなる姿にて、蕙を板に敷きてすずみ居侍りて、大きな打輪をもてあふがせなどして、往來の者、上下をいはず呼集め、昔物語をせさせて、我は内にそひ臥して、語るにしたがひて大きな双紙に書かれけり⁽²⁾

とあり、『烟花清談』の序文に、

独燈華の本に。冬籠もいと物寂しく。問人もなき雪の下庵に。書ちらしたる。旧章を取出し。青楼中の。奇事。雑談。所く。紙魚の喰残したるを。綴合せて見れハ。昔の人の面影をも。今見るが如し(中略)穴賢。竹取空穂の類に非。金竜山下の茶店に。往來の里語雑談を聴て。書集たる旧章より。見出るま、書ちらしぬ

とあるのを比べてみると、山奥に籠っている作者が往來のものを呼び寄せて、いろいろな話をさせ、草紙に書き散らすといった趣向が似ており、序の内容も做っていることがうかがわれる。

なお、前述した通り『烟花清談』序文の冒頭の和歌「よの中は山の奥こそ栖能けれ。草樹は人のとかを云ねは」は、奈良当麻寺に伝わる曼荼羅を織つたとされる伝説上の女性である中将姫が詠んだもので、継母に捨てられ父である右大臣藤原豊成と再会するまで暮らした山寺で詠まれたといわれる。『宇治拾遺物語』に做ったと思われる後に続く序文とあわせてみると、序文を書いた人のどこか

達観した様子が伝わってくる。

一方、暉峻氏は「流行の怪談」と述べているが、朝倉無聲編『新修日本小説年表』（一九二六年、春陽堂）で当時出版された本の題名を見てみると、確かに当時「怪談」や「奇談」と銘打つ作品が多くだされている。『烟花清談』の出版された安永五年（二七七六）は、秋成の『雨月物語』が出版された年でもある。この頃の読本は中国の白話小説の翻案が多く、怪談を扱ったものは『剪燈新話』の影響を大きく受けていたと考えられている。『烟花清談』では、第一巻第四話の「角近江や千代里幽霊に似せて鴝母を欺し事」第四巻第一話「化物桐屋怪異之事」、同巻第二話「万字や禿怪に馴事」、同巻第五話「大上総屋常夏執念其巻か勇氣之事」、第五巻第一話「女術又七幽魂に契事」が怪談に当たり、それぞれ類話はいくらもあるだろうが、管見の限り直接の典拠が見当たらないため、怪談の要素を取り入れながら作者が創作した話であると思われる。なお、暉峻氏は安永九年（一七八〇）刊の『隣壁夜話』が『烟花清談』の影響を受けていると述べているが、『隣壁夜話』は確かに吉原を舞台にした怪談ではあるが、『烟花清談』と類似する点や引用したと思われる点など、直接的な影響を感じさせる特徴はみられなかった。

また、遊女の美しさの形容も吉原細見・遊女評判記・洒落本などでは、遊女の容姿を具体的に述べたり、身に付けている衣装を事細かに記述したりすることで表現していたが、『烟花清談』では「嬋娟たる両の鬢」「宛転たる黛の色」「楊梅桃李の倂」「百の媚」「粉黛の色をからす」「常娥月宮を離。飛燕新粧に倚。面影」などであり、『水滸伝』や『長恨歌』の形容を借りて抽象的に表現するなど、他の吉原関連の本とは異なる趣向が見られる。

作者「葦原駿守中」

『烟花清談』の作者「葦原駿守中」については、鈴木俊幸氏が『青楼奇事烟花清談』の作者⁽³⁾、「『青楼奇事烟花清談』をめぐって⁽⁴⁾」で考察している。

鈴木氏によると、『烟花清談』の序末署名印の脇に押された二印のうち、下の円形陽刻印は「魚躍之印」と読め、「魚躍」は山東京伝の『近世奇跡考』（文化元年（一八〇四）刊）に、「高尾取置鬢水」の条に「此器ハ今より三十とせばかりさき、吉原の駿河屋魚躍といふ者、方円菴得器におくりあたへしを、ちかごろ某君にたてまつりしとなん。（中略）魚躍ハ烟花清談の作者也⁽⁵⁾」とあるように、「駿河屋魚躍」である。「駿河屋魚躍」は天明三年（一七八三）『飛花落葉』の追加の一条「吉原細見天の浮橋序」の四方山人による付文に、「右の一篇は此書編集の折から四方にもとめ侍りしが得がたくてやみにしを北里にすめる魚躍主（駿市）の記憶して口づから伝へしま、此書の末にくはへしるしぬ」とあるから、魚躍は「駿市」、つまり吉原仲之町の引手茶屋の亭主であった駿河屋市右衛門であり、『烟花清談』の作者「葦原駿守中」は駿河屋市右衛門であるとしている。この駿河屋市右衛門は、『吉原春秋二度の景物』に「此頃は年々仁和歌絵草紙板行たれば、其草紙にくわしく見ゆ、葛屋重三郎（五十間道往）など始之絵草紙となりしはじめ也、駿河屋市右衛門など草紙の板行世話しける⁽⁶⁾」とあり、葛屋重三郎の出版の「世話」をしていた吉原の実力者であったことがわかっている。文芸趣味のあった人のように、天明三年（一七八三）刊『万載狂歌集』に「しら露の

玉を穂末にむすへるハ秋のきつねの尾花とそみる⁽⁷⁾」の一首が魚躍名で入集している。

向井信夫氏の考証⁽⁸⁾によると、葛屋重三郎が一戸を構える本屋になるのは安永六年（一七七七）冬である。それまで葛屋重三郎は、親類かと思われる葛屋次郎兵衛の軒先を借りて本屋を営んでおり、安永三年（一七七四）に最初の出版物である遊女評判記『一目千本』を出している。『烟花清談』の刊行される安永五年当時は、まだ駆け出しの本屋であった。『一目千本』の巻末広告に、『名取客名取君吉原古代嘶近日出来』とあり、これが『烟花清談』にあたるとされているが、この時期に、売れないと見越したものを売るほどの余裕はなかったと思われる。

戯作者に潤筆料が払われ出したのは、馬琴『近世物之本江戸作者部類』に、

寛政に至て京伝馬琴の両作のみ殊に年々に行れて部数一万余を売るより書商葛屋重三郎喜右衛門と相謀りて初めてくささうしの作に潤筆を定めたりこは寛政七八年の事にて当時は京伝馬琴の外に潤筆を受る作者はなかりしに⁽⁹⁾

とあるように、山東京伝や曲亭馬琴の頃が初めてであり、『烟花清談』刊行当時はまだ作者の入銀による出版（自費出版）がほとんどであった。『烟花清談』も、おそらく作者の入銀によって製作されたものである。鈴木氏が、「市右衛門にとって本書は多分に趣味的な出版物、自分の息の掛かった身近な駆け出しの本屋と組んだお道楽と

いうことになる」と述べている通りであったのだろう。

『烟花清談』の本の造りをみてみると、丁によって字体がまちまちであったり、行の間隔がばらばらであったりと、同年出版された多色摺絵本『青楼美人合姿鏡』（勝川春章・北尾重政画）¹⁰と比べると、非常に大雑把である。鈴木氏はこのことから、想定される市場は広いものではなかったとし、「企画・製作から読者に供せられるまでの一連の過程において、その書が掛かり合う人的・地理的範囲をもって出版の規模を計るならば、本書の場合は、吉原本ほどではないにしても、至ってごちんまりとしたものであったということになる」と述べており、最後に『烟花清談』を「前期読本として一括りにされる作品群の中には簡様なものも混在している」と文学史上に位置づけている。

鈴木氏の述べるように、おそらく作者「葦原駿守中」は駿河屋市右衛門で間違いあるまい。『烟花清談』が趣味的な出版物で、広い市場を想定するものではなかったというのもうなずける。

しかし、板本を見ると手擦れの跡がついている。これは貸本として用いられて、多くの人に読まれたということであろう。これも鈴木氏の指摘された資料であるが、柳沢米翁『宴遊日記』巻六下の安永七年閏七月十二日の条に「昨日より烟花清談求めよむ」¹¹とあり、少なからざる読者がいたことが知れる。

確かに、『烟花清談』は前期読本として一括りにされてしまう作品かもしれないが、吉原の引手茶屋の亭主によって書かれて出版されたこと、それが江戸市中の本屋ではなく吉原という土地から出版されたこと、その吉原の実力者が入銀という形で駆け出しの葦原重三郎の出版を世話したことなどから、他の前期読本とは違う性質を

持っているということがみてとれるのである。

画工「鄰松」

第三卷「山本や秋篠敵打の始末之事」十丁表の挿絵中に「隣松戯画」と書かれている。鈴木俊幸氏は、この「隣松」を「鈴木鄰松」であるとしている¹²。

鈴木鄰松については、詳細がよくわかっていない。鄰松は享保十七年（一七三二）に幕臣、松橋茂伴の次男として出生した。のち、同じ幕臣の鈴木正友の養子となり、その娘を妻とした。『寛政重修諸家譜』¹³によってその経歴をみると、宝暦十二年（一七六二）に家督を相続し、安永三年（一七七四）に辞職して、同七年致仕。没年は享和三年（一八〇三）、享年七十二であった。菩提寺は小石川法伝寺といわれている。本姓は藤原、名を茂銀、通称は源太左衛門（あるいは源左衛門）といい、『古今墨蹟鑒定便覧』¹⁴「画家書家医家之部に、画家としてその名が見られ、号には鄰松の他に、素絢齋・芝山館主人・珉山などがある。

作画は幼時から好んだようで、四、五歳頃に鼠を捕える図を描き、人を驚かせたという逸話がある。正式な習画は、木挽町家の狩野栄川典信（一七三〇〜九〇）に師事してからで、宝暦頃から巷間の人気が高く、文麗、円乗とあわせて専門家外の三巨手と評されたという。また貴客の評判も良く、招致されることがはなはだ多かったとも伝えられている。『武江年表』¹⁶の明和八年（一七七二）の記事には、この年の画家として、師の栄川とともに「鈴木鄰松」の名前がみえる。

作品は大半が板本と肉筆画であったが、人気のわりには遺存するものが少ない。肉筆画では「馬上武人図」(紙本・個人蔵)や「関羽図」などの武人図が知られ、また洋風表現で珍獣を描いたものもあり、狩野派以外の様式も示していることが窺われるものである。錦絵の作品は現在のところ確認されていないが、摺物に「旭日に梅鉢」や、十三歳の作画になる「大黒図」など若干がある。これに対し板本の分野では、英一蝶や狩野探幽に私淑して、その粉本をもとにした画譜の出版を行っている。たとえば探幽の粉本によった『狂歌苑』や、一蝶の粉本による安永七年(一七七八)『群蝶画英』¹⁷⁾などがある。

『烟花清談』の第二巻第三話に「紀伊国や文左衛門強奢友を控事^付英一蝶浅妻舟之事」があるが、英一蝶もまた、狩野派出身で風俗画に転向したということがよく知られている画家である。鄰松が一蝶に私淑していたということと、『烟花清談』が一蝶を扱ったこともあるいは関係があるのかもしれない。

気になるのは、鄰松が狩野派の絵師ということである。狩野派といえ、幕府の奥絵師であり、御目見以上御同朋格にもなるほど格式のある流派であった。鄰松がそこまでの画家であったとはいえないであろうが、そのような絵師が戯作、しかも吉原を舞台にした作品の挿絵を描くに至ったのはどういった経緯があったのであろうか。

『葦重出版書目』によると、鄰松は葦屋重三郎板の狂歌集に挿絵をししばし寄せており、寛政五年(一七九三)の狂歌集『春帖』、寛政七年(一七九五)の狂歌集『四方の春』、同年の狂歌集『春の色』、寛政九年(一七九七)の狂歌集『柳の糸』にその名が見られる。葦屋重三郎も、『近世物之本江戸作者部類』中本作者部に「天明のは

しめ書買畊書堂葦重(狂名を葦ノ唐丸といひけりしかれともみつからはえよまず代歌にて間を合したり)」とあるように自分では歌を詠まなくても「葦唐丸」という狂歌名を持っており、狂歌の会には参加していた。『春帖』には、「春雨にぬれ鼠なら鶯の鳴音もあとを長くひけかし 葦唐丸」の歌を寄せている。¹⁹⁾あるいは、そういった会合で二人は出会ったのかもしれない。

もう一つ鄰松と葦屋重三郎を結びつける資料がある。喜多川歌麿の浮世絵「青楼十二時卯ノ刻」(寛政六、七年(一七九四、九五)頃)である。この画中、遊女が持っている羽織の裏には、「鄰松画」と名前が入った達磨の絵が描かれている。鄰松が実際に達磨部分だけ描いたのか、歌麿が鄰松の画を模して描いたのかは不明であるが、このことについて、浅野秀剛氏は、「奢侈禁止令の影響もあって、当時の金持ちの通人の間には、みえないところに贅を尽くすことが流行した²⁰⁾と述べている。葦屋重三郎が「みえないところに贅」として画工に鄰松を抜擢したのかはわからないが、喜多川歌麿の価値をわざわざ下げるようないい加減な絵師の絵を載せるはずがないし、「鄰松」という名前をわざわざ見えるように入れているのも、そうすることで宣伝効果があることを期待していたということなのである。そして恐らく鄰松もこの画のことは承知であったはずである。喜多川歌麿は葦屋重三郎の抱え浮世絵師であり、葦屋重三郎と関係の深い人物であったことがわかっていて、このことからしても鄰松は葦屋重三郎とつながりがあり、挿絵を描いてもらうには充分な人物であったといえそうである。

いずれにせよ、『烟花清談』の挿絵は「隣松戯画」の文字通り、「戯」に描かれたものであろう。狂歌集『柳の糸』にはきちんと「鄰松

画」と書かれている。当時最も人気のあった絵師、勝川春章・北尾重政の合筆による『青楼美人合姿鏡』と比べるとあまりにも稚拙で雑な絵である。

同時期の読本『雨月物語』は、本文に書かれていないことが挿絵に描かれていたりするが、典拠を調べて初めて挿絵の意味がわかる。²¹ 稿本が残されていないので、秋成が画工に指示していた証拠はないにしても、作者が無関係であるはずがないのである。そこには、作者である秋成が作品世界を深めようとする意思が見受けられる。

しかし『烟花清談』の挿絵からはそういったことは読み取ることができない。作者であると思われる駿河屋市右衛門と板元の蔦屋重三郎、そして画工である鄰松は同じ文化圏²²におり、その三人が利益を上げるためではなく、趣味的に作ったものだからであろう。

寛政二年（一七九〇）に二度にわたる出版禁令が出たにも関わらず、山東京伝は洒落本の三部作『仕懸文庫』『娼妓絹籠』『錦之裏』を執筆し、咎められて五十日の手鎖の刑を受ける。その三部作の一つである『娼妓絹籠』の結末には、

梅川がとつ、おつ、の胸算用おもひに迫る此時節モシこふしてにげたらばいかゞあらんと心のうちに思ひしはさだめてかくもあるべしとすいりやうしたる其始終筆のゆくまゝかきつゞり色情に終身を謬ともがらのすこしは戒ともならんかと蔦の唐丸がもとめにまかせ紙くずかごよりひろひ出しそこらこゝらをつゞりあはせてついに小冊となし侍りぬ²³

とあり、『錦之裏』序には「一日書肆蔦唐丸来て曰。例の小冊の案

じはありやなしやと。予答へて曰。まだあるく²⁴と」とある。蔦重の要請によって執筆されたことがわかる。このように板元は、作者に無理が言え、かつ作品の内容にかかわることまで口出しできる存在であった。また、筆禍にあった寛政三年（一七九一）に山東京伝の黄表紙『箱入娘面屋人魚』が刊行されるが、その序文に板元の重三郎が「まじめなる口上」を寄せており、それには、

まづもつてわたくし見せの儀おのく様御ひあきあつく日まじはんじやう仕ありがたき仕合ぞんじ奉り候扱作者京伝申候はたゞ今までかりそめにつたなき戯作仕り御らんに入候へどもかやうのむゑきの事に月日および筆紙をついやし候事ふかくこれらをはぢ候て当年よりけつして戯作相やめ可申とわたくし方へもかたくことはり申候へ共さやうにては御ひいきあつきわたくし見世きうにすいびに相成候事ゆへせひく当年ばかりは作いたしくれ候やうに相たのみ候へば京伝も久しきちいのわたしくしゆへにもだしがたくぞんじまげて作いたしくれ候すなはちしやれ本およびゑざうししんぱん出来候間御好人さまはげだいまくろく御らんの上御求可被下ひとへに奉希候以上

寛政三つ亥の春日

板元 蔦唐丸²⁵

とあり、京伝は戯作をやめようとしていたにもかかわらず、重三郎の店が衰微したために無理を言つて京伝に筆を採らせたことが分かる。

画工においても、溪斎英泉が板元について「此畜生と心に云ひ、

心に答へて金銀の縄につながる。嗚呼衰えたるかな(26)と板元についての怒りをぶつけているが、板元とは出板において大きな力を持ち、作品を左右する存在なのである。

しかし、『烟花清談』からは、そういった板元の重圧は感じられない。作者の入銀であることが大きいと考えられるが、作者、画工、板元は対等の関係で作品を作り上げたという雰囲気伝わってくる。かように、『烟花清談』は他の読本とは趣きを異にするものであった。

- (1) 板本では「戯」となっている。
- (2) 新編日本古典文学全集『宇治拾遺物語』(一九九六年、小学館)。
- (3) 鈴木俊幸「青楼奇事烟花清談」の作者」(『読本研究』五、一九九一年九月、溪水社) 所収。
- (4) 鈴木俊幸「青楼奇事烟花清談」をめぐって」(近世文学研究叢書9『葛屋重三郎』、一九九八年、若草社) 所収。
- (5) 『近世奇跡考』(新装版『日本随筆大成』第二期第六卷、一九九四年、吉川弘文館) 所収。
- (6) 『吉原春秋二度の景物』(『未刊随筆百種』第一卷、一九七六年、中央公論社) 所収。
- (7) 『萬載狂歌集』(古今夷曲集 萬載狂歌集 徳若後萬載集)、一九一五年、有朋堂書店) 所収。
- (8) 向井信夫「吉原細見(二)」(『洒落本大成』第八卷付録、一九八〇年、中央公論社) 所収。
- (9) 木村三四吾編『近世物之本江戸作者部類』(一九八八年、八木書店)。
- (10) 『烟花清談』の巻末に広告が載る。
- (11) 『宴遊会日記』(『日本庶民文化史料集成』第十三卷、一九七七年、三一書房) 所収。
- (12) 鈴木俊幸『葛屋出版書目』(一九九八年、青裳堂出版) 参照。
- (13) 『新訂寛政重修諸家譜』第二十一(一九六六年、続群書類従完成会)「鈴木茂銀」参照。
- (14) 『古今墨跡鑒定便覧』(『近世人名録集成』第四卷、一九七六年、勉誠社) 所収。

(15) 狩野派は、鍛冶橋家、木挽町家、中橋家、濱町家の四家が江戸幕府の奥絵師としての格を持っていた。

(16) 『定本武江年表』中(二〇〇三年、筑摩書房)。

(17) 板元・売出し共に山崎金兵衛で、『割印帳』に載る。『割印帳』には、他に、明和九年(一七七二)に郷松が描いた『絵本七笑顔』がこれも板元・売出し山崎金兵衛で載っている。

(18) 同朋は江戸幕府の職名。各諸大名、諸役人の登城のとき、その雑事や茶の湯の相手を務め、殿中の掃除をした。定員十名前後であったという。

(19) 市古夏生「春帖」(解題と翻刻) (神保五彌編『江戸文学研究』、一九九三年、新典社) 参照。

(20) 『喜多川歌麿展』図録「解説」(一九九五年、朝日新聞社)。本展は一九九五年十一月三日から十二月十日まで、千葉市美術館で開催された。

(21) 挿絵の典拠については長島弘明『雨月物語の世界』(一九九八年、ちくま学芸文庫)などに詳しい。

(22) 吉原という地が三人を結びつけていたということもあるが、三人はともに狂歌に関心を寄せていたので、その趣味が三人を結びつけていたということも充分考えられる。

(23) 『娼妓絹籠』(『洒落本大成』第十六卷、一九八二年、中央公論社) に拠る。

(24) 『錦之裏』(『洒落本大成』第十六卷、一九八二年、中央公論社) に拠る。

(25) 『箱入娘面屋人魚』(『山東京傳全集』第二卷、一九九三年、ぺりかん社) 所収に拠る。

(26) 『無名翁随筆』「大和絵師浮世絵」(『燕石十種』第三卷、一九七九年、中央公論社) 所収に拠る。

『青楼 烟花清談』 翻刻

【書誌】

内題 「烟花清談」

外題 「青楼 烟花清談 一（〜五）」（楷書から次第に崩し四五巻は「煙華」）

書型 半紙本（二二・五×一五・八糎）

巻冊 五巻五冊

見返 なし

序 「烟花清談之序」安永五年申孟春、葦原駿守中識

匡郭 一八×一三・七糎

構成 卷之一序（一〜二）・目録（目）・本文（一〜九才）計一二丁、

卷之二目録（目）・本文（一〜一三才）計一四丁、卷之三

本文（一〜一五ウ 三丁が二枚で五丁欠）計一五丁、卷之四

目録（目）・本文（一〜一ウ）計一二丁、卷之五目録（目）・

本文（一〜一三ウ）計一四丁。

作者 葦原守中

画工 鄰松戯画（卷三の一〇才）

刊記 「安永五年申春、耕書堂藏板」（卷五の一三ウ）

広告 「美人合姿鑑」箱入 全三冊、此書は當時よし原の名君の

姿を北尾勝川の両氏筆を揮れにしき繪に摺たて居ながら紛

黛のおもかけを見るか如くに出版仕候御求御覽可下候、東

都書林 日本橋萬町 上總屋利兵衛・新吉原大門口 蔦屋

重三郎梓」（後表紙見返）

諸本 京大（國文學 P-8）・岩瀬（72-118）・都中央加賀（913-WA-1

〜5 / E5059）・国会（188-233）

備考 京大本の尾題「艶花清談之終」、他本は「艶花」を削る。

【凡例】

一 可能な限り原本に忠実に翻刻した。

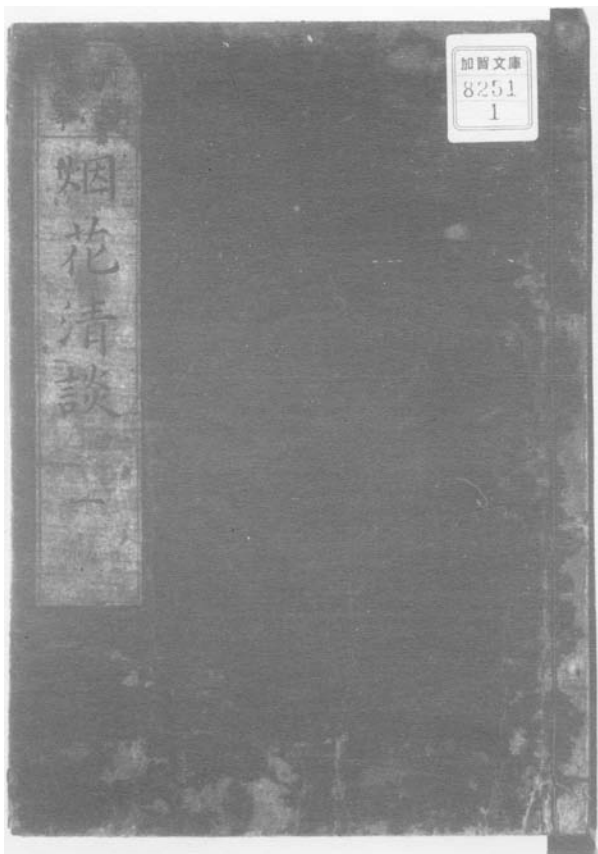
一 助詞の「は」については平仮名の意識で使われたことを承知の上で、読みやすさを鑑みて「ハ」と片仮名の字体のままにした。

一 明らかな衍字や誤脱を私意に拠って補正した場合は「」で括って示した。

一 底本は都立中央図書館加賀文庫本に拠った。

一 本文テキストは、高木吏佳（文学部卒業生）が礎稿を作成し入力したものを、高木元が補訂し、さらに及川季江（大学院博士後期一年）の校閲を経て成ったが、最終的な判断の責任は高木元（元）に帰する。

【表紙】



【序】



烟花清談之序

よの中は山の奥こそ栖能けれ。草樹は人のとかを云ねハと。獨
燈華の本に。冬籠もいと物寂しく。問人もなき雪の下菴に。書
らしたる。旧章を取出し。青楼中の。奇事。雑談。所く。昏魚の
喰残したるを。綴合て見れハ。昔の人の面影をも。今見るか如し。
さハいへとも。其心の變行事。縦ハ。淨瑠璃小唄もむかしに變。
義太夫節にハ。豊後松傳か節を加へ宮古路富本は¹淨瑠璃に。
竹本。豊竹か。節はかせを付たり。去れハ。義太夫か。豊後か。唄
か。半太夫か。交こせになりぬ。かたり上手有と雖。聴下手多く。
今遊里に遊人も。遊ひ上手有。聞上手あり。うつり行世の人心。様
なる中に。心變ハ品容。先近比の七細とて。鬚先細。眉ほそく。
羽織の紐。帶。脇差の細拵。艸履雪踏の鼻緒までも細成行ぬ。又
真先。二軒茶屋の田楽も。物の足を飲て。佳肴珍味に變して菜¹ウ
飯祇園豆腐の古風を失ひ。いにしの太夫格子ハ。今の中三と變。
散茶うめ茶の古風も。付廻物貳と變りて。伊達風流をつくすこと。
むかしのおよふところにあらず。目に倦す聞にあかず。されとこし
方の人の心のなつかしきま。書つらねて見れハ。巻ハ五つになん
成ぬ。穴賢。竹取空穂の類に非。金竜山下の茶店に。往來の里語
雑談を聴て。書集たる旧章より。見出るま、書ちらしぬ。宇治
物²語の古めかしきに擬して。今昔の。二字を其事の始に冠らし
む而已

安永五年申孟春

葦原駿守中識

「守中」「魚燈之印」²

【序末・目録】

烟華清談一之目録

- 山本や勝山感^レ身放^二白頭翁^一事
やまもと かつやま みをかんにしてしまひよりをはなす
- 三浦や薄雲愛^レ猫遁^二奇難^一事付^{タリ}
みづら うすくもねこをあいしてあやしきなんをかる、
たからぬきかくねこをよみしほつ
- 宝井其角詠^レ猫発^句事
やまきりやおとは きつねにばかされんとする
- 山桐屋音羽野狐欲^レ魅事^付タリ
きつね かいきやうけん
- 狐女良買狂言^レ事
かとおふみ ちよさと ゆふれいにてやてをあざむく
- 角近江や千代里似^二幽霊^一欺^レ鴝事^目オ
「白」^目オ

烟花清談之一

山本やかつ山感^レ身放^レ鳥事

今はむかし。京町二丁目山本やか許に。かつ山と云つる。遊女有けり。婢娟たる。両の鬢ハ。秋の蝉翼をしほめ。宛轉たる黛の色ハ。遠山の霞を帯たるに似たり。姿容の。美しき而已に非心たて又類なし。自髪^の風を結出して。一郭^は是かために容を奪る。今世に云處の。かつ山風是なり。一とせ。此かつ山かもとに去る貴公子の。かよひ給ひしか。遅々たる春の日も長しとせず皓々たる秋の長さ夜も是か為に短とす或日。かつ山か方へ長崎より来しとて。白頭翁を贈られける其鳥籠の結構。云斗なし螺佃沈金の¹細工を盡し。金銀のかきりいと目覚し。真紅の打緒に籠をむすひ。堆朱の臺に乗せたり。其比ハ。白頭翁の日本へ渡る事珍しき時節なれハ。家内の人^は扱おき聞及し人ハ。めつらしき見物とて打寄て詠ける。鳥類

さへ。かゝる美しき籠の内に居事。冥加に叶し鳥なりと。或ハ籠を譽。鳥を羨も。おほし。かつ山。つくく^と鳥を見て居たりしが。公界する身の容を。かさりて多の人にもてはやさるゝも。此鳥に異なる事なし。其身かく。美しき籠の内に有といへとも。さそや。元の林に遊ん事を思ふらんとて。自籠を開おしけなく是を放しぬ。開^レ戸放^二白鷗^一と賦せし。唐人の心にも似ていと尊く侍る¹」

三浦や薄雲愛^レ猫災を遁し事付 其角発句

今はむかし元禄の始。京町一丁目三浦やに薄雲といへる遊女あり。沈魚落^レの姿美しく。楊梅桃李の佛たをやかにして百の媚いはんかたなし。いにしえの衣通姫小町とも云つへき面影にして。糸竹の業は更なり。和哥俳偕の道も工にして情のみち又いはんかたなし然るに此薄雲。猫を愛ける事。いにしへの女三宮にもこえたり。常に毛なみ美しき猫にから紅の首綱を付て。禿にいたかせ。揚屋に到れり薄雲用たしに行ときハかならず此猫後を慕ふ後には人々不思議をたて。此猫薄雲を見いれしと誰云としもなく私語合けり。後ハ三浦の亭主も²是を聞。公界する身に。かゝるうき名たちてハ。能からぬ事と彼猫をいましめ置けり。折ふし薄雲 厠へおもむきける。後影を見るより此猫背を立歯をむき出してけしきをかへ。忽綱をかみ切料理場を一走り。飛おりて行所を。料理人。庖丁を持居けるま、一打に切けるか。あやまたず。猫の首。水もたまらず打落して。むくろハ組板のもとに残れとも。頭ハ。いつち行けん見えすなりぬ。然るに。薄雲か居たりし厠。物騒しき音しけれハ。薄雲ハ。此音に驚きはしり出しかくと云ける儘。男とも立寄て。厠の踏板を引



放見れハ大成蛇のかしらに。彼猫の首は喰付て有ける。いつの比よりか。此蛇雪隠の下にかくれ。」薄雲を見いれしを。猫のみ知て。廁へともに行。薄雲か身を守護なしけるともしらすして。猫を殺しけるハいと不便なりとて。猫の。亡骸ハ。菩提所へ葬遣しける。其比揚屋へ到る太夫格子。みなく猫を禿に抱せて道中なしけるとなん。

京町の猫かよひけり揚屋町 宝曹齋 其角
と云る句も。此心なるへし。

山桐や音羽野狐に欲魅事付リ 狐女郎買狂言の権輿

今ハむかし享保の比。江戸町二丁目に山桐やに。音羽と【挿絵
第一図】いへる遊女有ける。比しも五月雨の降すさみて。杜鵑の
声おほつかなく。田毎の蛙かしましき折から。みせより。音羽を見
立て揚る客あり。若い者ハ迷。艸盆。吸物など出し取はやすうち。
連来りし茶やの男。あなたにハ。とかく物云事の御嫌ひなる故。萬し。
其心くにて取扱給はれと云に。客廻しの若い者も差心へ。女郎
へもしかくと咄。盃も数かさなりける折に。客茶やの男にはや帰
れといへとも。初ての客ゆへ。彼是と座敷にきはしに。咄しなと一ッ
二ッするうち。客ハ。とかく帰れとたつて云ゆへ。跡をたのみて帰
りける。ほとなく膳など出。女郎ハ次へたち。若い者禿ハ。御膳を
上り候へといへハ。よふあらバ手を叩へし支たくの内ハ。座敷に無
用と云ける」ま。若い者も合点ゆかすたぢくとするうち。達
而今の内用事を弁へしと云つけ。此方用事あらハ手を叩へきま。
支度の内ハ。捨置呉よとの頼ゆへ。若い者も立振して次の座敷より。

密に覗見るに。客ハあたりを見廻し。膳の上にある物皆おろし。膳の上へ飯をあけ。其上に刺身汁鱈等を打あけて。箸にて掻廻し。あたりを見る躰。いよ／＼怪しと見るうちに。客ハ顔を善の中へ入。狗猫などの物喰如く。一口喰てハあたりを。見廻し／＼するてい気味あしく。斯する内不殘喰盡して後。鼻帟を取出し膳を拭。我顔のよこれを拭たる有様。おそろしともいはん方なし。扱しはらく過て。手を叩けハ。誰行んと云者もなし。今は「是非なく親方へ咄し。今まで連來りし茶やへ。人を走らせ。音羽へもしか／＼と様子はなし。斯するうち。茶やの男も來りけれハ。音羽かたへ。よん所なき客來れりとて。もらはんと云。茶やも詮方なく。客へ右の段断いへハ。然らハ名代にて今宵ハ遊んと云。茶やハ何の訳しらぬ故。名代を出せと若い者に言に。とかく右の客。かへし呉候様にと。たつて頼ゆへ。茶やの男も腹を立。いか、の訳と問へハ。若い者ハこは／＼。右のあらまし語聞せけるに。茶やも膳をけし。よふ／＼と云葉を盡て客ハかへしけり。是よりして其比。音羽か方へ。狐の女郎買に來りしと。専評判ありし故。外々の客もおのつときみはるく。誰々も「かよハさりける是ハ音羽にふられし客の意趣かへしなるへし其比。十八公今ようそかと云。狂言に取組。古澤村訥子。狐女郎買の仕うち。古今の名譽を今に残せり。

角近江や千代里幽霊に似せて鴛母を欺し事

今ハむかし京町二丁目。角近江やと云るに。千代里と云娼婦有。みめ容能。往々ハ。家の太夫ともなるへきものなるか薄命にて客もなく來る年の暮。魂祭文月。二季の移「り」かはりも。えつとて

心にまかせず暮せしか。風の音にそおとろかれぬる。「6 初秋の比。鴛母に入用の事ありて。金子少々かりけるか。約束の日も過て。返す事も出來かね。一日と立二日過。けふそなき魂の來るといへる夜まで打過けるに。鴛母ハはらを立。常々心つよく。鉄心漢なれハ。大勢の人の中にて。千代里をはししめ。金子を返さず延々にせし事をいきとをり云つのりけれハ。友傍輩の女郎も。きのとく身に餘り。とやかくと鴛母をなため。其座を退けるか。千代里ハあるにもあられす。おのか部やへ帰。心易き傍輩女郎に差向。涙にくれ。我身の薄命を語。金子を返さず。延々になりしハ此身の誤と雖。あまりといへハ公界するみ。情なき仕方。翌よりハ誰に面を向られん。今ハ此「も」身も思ひ切待ると。泪と共に剃刀取出し。覚悟の躰に。傍輩女郎も。「も」彼是と昇見して。是をなため。よふ／＼と取鎖けるか。所詮金子さへ返せハ濟事なりと。友女郎の情にて。金子調遣しけれハ。千代里ハ嬉しき身にあまり。悦にも又泪なり。鴛母に早速かへすへしとハ思へとも。あまりとや人中にて。耻をか、せくれし事の口惜けれハ。返すにこそ仕方あらんと。工夫をなし。引け四ツも過彼是と。丑三つ近くなる比。千代里ハ。かもし取出し頭に頂き。白粉といてまばらにけはひ。白帷子を身に着し。鴛母の部やへ心かけ。明障子ヲ靜に明て。鴛母か枕もとに擱越に居り。聲をほそめてもし／＼とおこす声に。鴛母「目を覚し。見れハ。丈なる髪を振みたし。顔色青さめたる女の姿有。はつと斗に夜着引かふり。念仏となへて震ひ居を。千代里ハなを哀れなる聲ふるはし。先比ハこなさんに。よん所なく無心を云金子をかりまいらせしに。不仕合なる我身の上。返す工面もまちかひしゆへ。一日二日と過るうち。こなさんに耻しめられしハ。無理とハさら／＼。そんなねと

も。人中と云公界のみ。よしなくうらみし面ほくなき。かん忍してくんなんせと。二聲三聲しり聲なく。金子をそつと枕もとに差置つ。跡しさりして障子を建。傍輩女郎の寐たる。囀の内へ。いきをつめて来りつ。帷子かもしも取かくし。しらぬ躰にて寐たりけり。鴛母ハ一心不乱に夜着の内にて。念仏となへ。」夜の明行をまてとも。秋の夜いまた。なからぬ比なから。千夜を一夜の心地して。よふくく鶏の聲もきこへけるま。夜着の内より差覗。見てあれハ。朝日まはゆき比。よふくく人心地になり。起出て見れハ枕本に金子有。扱は夢にてハなかりけりと。いよくきみ悪く。千代里か臥たるかたへぬき足していたり見れハ。千代里ハ夜に見し姿ハ露もなく。髪も取あけみたれもせず。寐姿わるく臥たる有様に。いよく鴛母ハおそろしく。彼是するうち千代里も。起出て身こしらへする所へ。鴛母ハ常に事かはり。笑顔を作りしとやかに。時ならぬ今朝の涼しき。烟草吸付しなから千代里か顔つくく見て。おまへの器量おしたてなら。太夫様」にもなるへきもの。かく不仕合にて居給ふゆへ。何卒人並に意地を出させ。太夫様にも仕立んと。わさく人中ではぢしめしハ。おまへのみのためを思ひしゆへ。必くわつかの金故斯申せしと思召も耻かし。此上とても有事なり。いつとても不自由なら。必慮し給ふなど。夜前の金子取出し。是ハ時分からおまへのかたにも入用ならん。私かたにハ不自由にもなきま。心おきなく遣ひ給へ。我身かたへ返し給ふハ。いつにでもくるしからず。誰しも工面のあしき時は。しゆつなきものと此上とても遠慮なく。少の事ハの給へと。千代里ハおかしきこらへ涙くみ。堪忍してくんなんせ。出来さへすれハ何か扱。直にかへし申ます。未かへさぬとてその様にの給へハ。此上ハ死ぬるかせめての

云」訳と。泪とともにかきくとけハ鴛母ハ金子をかへさぬと云一云にそつとしておそろしくなりしか心を取直し。其様に気の弱事あるものか公界するみハ猶更なり。此上とても必く遠慮なく。不自由な時ハの給へと。以前の金子さし置つ、いにしへ今の勤の身のしゆいなき咄に座をくろめ。おのれか部やへかえりける夫よりして此鴛母鉄心所もいつとなく。慈悲才一の人となり新造禿に至まで。情をかけて恵みける。勿論千代里を我娘のこことくいたはり遣しける。烟花清談之一終

烟花清談二之目録

- 松屋松か枝俠氣之事 付タリ 總角之助六事
- 俠客介六之實事
- 中万字や玉菊全盛并 燈籠之權輿 付タリ
- 河東追善廻向之事
- 紀伊国や文左衛門 俠奢挫レ 友事 英一 蝶浅妻舟事
- 三浦や小紫貞操之事 付タリ 平井權八比翼塚事
- 八重梅之詞」目」目

烟花清談之二

大松や松かえ勇壮之事 付リ 總角介六之實説

今はむかし。江戸町二丁目大松やか内に。松か枝とい、し遊女有り。其艷色ハ云も更也。繪書花むすひ。琴三弦にいたるまで。何くからからす。殊に情の道はもとより。川竹のおきふし繁中に。介七

と云客に。深馴染。春の夜の夢はかりなる契には。遠寺の鐘を恨。冬の夜の長き比は。比翼の夜着に百とせの契をこむ爰に又。湯嶋のほ」¹とりに田中三右衛門と云者有。此松かえに。心を懸しかとも介七かわりなき中にさゝられて。一夜の枕たにならへさるをいきとをり。男伊達をかたらい。介七を闇打にせんと工けるある日。介七を。二丁目にて見かけ。彼男伊達とも。喧嘩をしかけ今は互にこらへかね。脇差を抜はなし。爰を最期と打合しか。介七は。力量人に勝れ。其上 劍術の妙を得しかハ大勢をさんくんに切ちらし相手ハ手負かぎりなし所より八月行事又は番人手に手に棒をたづさへて取巻けるに介七は既にとりことならんとせし折松かえハ中の「町にて斯と聞よりはしりつき群集を押し我うちかけの裳へ介七をかくしさりけなき躰にて大松やの二階へともないあやうき場所を遁しける其比皆松か枝か勇氣を感じける正徳三巳年山村長太夫か芝居にて此事を取組大平記愛護若と云狂言せり市川栢庭介六となりて古今の名譽を顕し今以介六之狂言ハ市川一家の藝なり介七は御蔵前にて福貴の人なれハ其名を遠慮して介六と狂言に取組ぬ此介七男をたて、人の知りし者なり常に帯せし脇差を」²す衣と云委細の事ハ馬文耕か晁翁か傳にゆずりてもらしぬ今芝居にて総角が裳へ介六をかくすハ松かえか事を総角になぞらへり

三浦や山路か客月見の事

今はむかし揚屋町ゑひやかもとへ田舎登りの客来りて三浦やの山路といへる女郎に逢ける衣服も廉相なるを着し人品ハよろしき人からなり比しも八月のはしめつかたなりけるかうらやくそくは十五日

に来るへしと約束せしかハ揚や夫婦も」²十五日は。月見にて。此里の大紋日にて殊に。彼是。物入もおほく侍る段。くわしく咄ければ。夫は少しもくるしからすとて入用の品間合金子を揚やへ渡し帰ける。程なく十五日にもなりしかハいせんの田舎客は木綿のふるき風呂敷に。重箱躰の物を包。自身に提て来りつゝ。ゑひや夫婦ハ。出迎笑顔をつくりて愛想能饗しける。山路はとくより来りて待居より座敷ハ何か花く敷かさり。藝者牽頭も出迎。とりくに饗。盃のかすもかさなりし坎。田舎客ハ包し風呂敷をとり出し。包ほとけハ内ハ。會津塗の大重箱を取出し。蓋を開ハ。見るもいふせき団子を。うづ高く入たりける」³をニツ三ツ、新造禿。遣りて揚や夫婦をはしめ。内外の者へ遣はしける名にしほ今宵ハ。皆く佳肴珍味に飽みちて。誰とり上る者もなく。或ハ。小庭ゑん側へ打捨ける。揚やのてつちも。ニツまでもらひけるか。臺所へ持出。しよせんなく一口喰けるに。かりくと。齒へさはる物有けるま、吐出して見れハ。小粒三分有けるま、。残る一ツも嚼破見れハ。是にも金子式分ありけるま、皆くへ見せけれハ。家内ハ急にさはき出し。爰やかしこと。取前捨し。團子をさかしける。或ハ昏燭をともす者も有。蠟燭をともして縁側。小庭臺所の隅くまてくまなくさかし求ける。欲にハ変と人心。かしこにてハ一ツ見つくれハ。互にあらそひ取けるま、忽」³家内群集をなし争ふ有様。田舎客ハ露しらぬ顔にて。其夜を明し帰ける

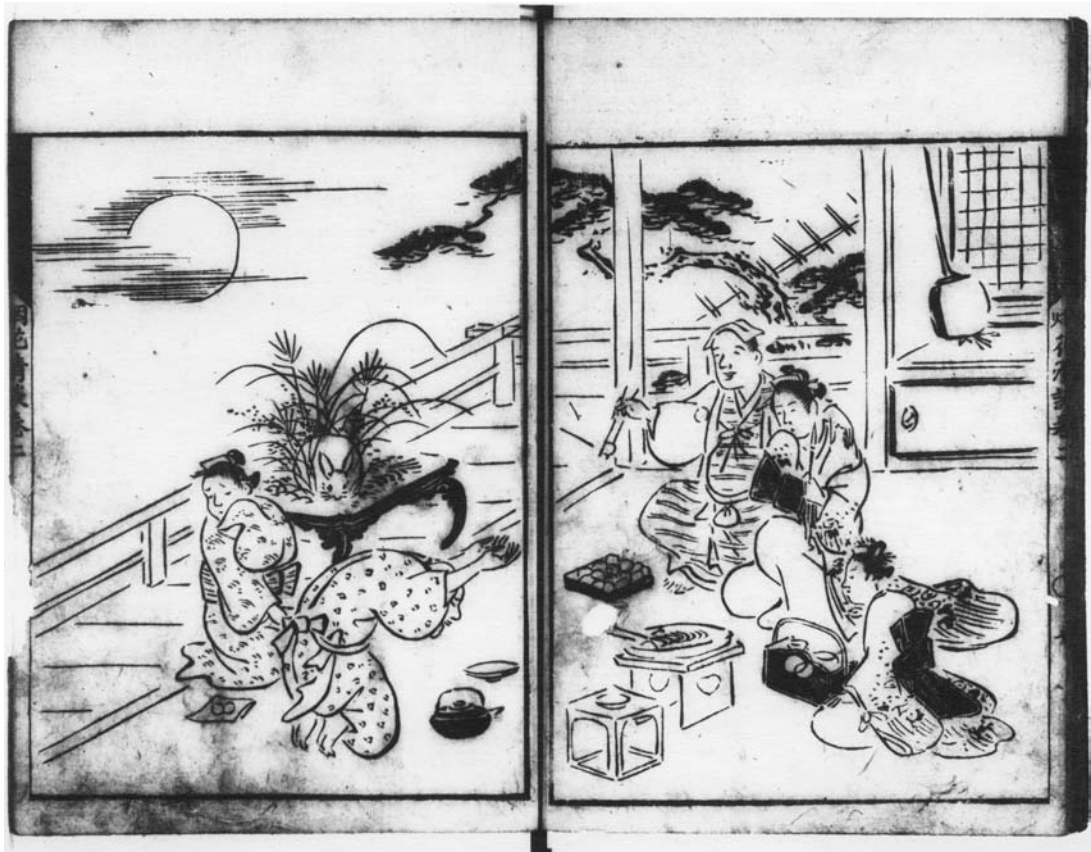
中万字や玉菊全盛の事 付 燈籠の権輿并河東追善廻向之事

今ハむかし正徳享保の比。角町中まんしやに。玉菊といへる遊女有

ける。百の媚自然と備り。粉黛の色をからす。さながら楊家の深窓を出し。貴妃かむかしも斯や有けん。人毎に其愛敬の餘りあるをや。常々出る茶やハ勿論。其外の茶や。藝者に至るまで過分の心付をつねになしけれハ。誰あつて玉菊あ⁴しかれと思ふ者もなく。影なから。其全盛をいのらぬ者もなかりけり。或ハ牽頭末社に至るまで。其仁愛を感じしたひけるは。桃李ものいはす下おのつから徑をなす心地にて。五丁第一。全盛の名ハとりける。然るに水無月のはしめ。風の心地にてふと打ふしけるか。文月のはしめ。終に黄泉の旅におもむきける。百薬。もちゆるかするしなく。扁鵲。荆棘の林に遊はす。誠に馬塊一夜の夢の心地して。おしなめ悲の泪。腸を断けり。あるへきにあらねハ。終にハ。化野の夕の煙ほそく。結ぶも嬉し。忘れかたみにと。霍のはやしの霜おけるさまとて。人々のかなしみ。云もさらにして。親。はらからにあらねとも。子をうしなひし思ひをハなしける。玉菊か。亡跡の追福に。心易茶や。軒毎に挑灯をともして。冥闇を照しける。有様。小松の大臣。四十九院を表し。ともさしめ給ひし。燈籠の傍にかよひ。又初秋の物淋しき。夕暮の。景色を増けれハ。見物の。貴賤おひた、しかりける。よつて。享保元の初秋ハ。中之町家毎に。しまの挑灯をともしけるに。去年にまさりて。見物もましける。破笠と云る者。はしめてからくりの。燈籠を工出してより。年毎に。互に燈花の精妙を盡して。今に至りぬ。扱⁵玉菊。三回忌には。水調子と云。河東節の編て。一郭是かために悲をそへける。

紀伊国や文左衛門強奢友を挫事 付り 英一蝶 浅妻舟之事

今はむかし。紀伊国や文左衛門と云る者あり。もとハ賤き身なりしか山事受負にか、り百万両の餘。金銀を儲。後所々の普請に又数万両の儲て。榮花の身となり。遊里に遊んで金銀を蒔事。土瓦の如し。誠に。玉を礫とし。金を塊となせし秦人の。むかしも⁵おもひ出られぬ。其比石町に。貸座鋪して京大坂の大盡。江戸見物に來かねて。紀文とハ。かわせのとりやりにて知り知られたる中なれハ。紀文か。深川の宅へ三人を招ける。其饗ハ。珍膳美食を盡し。一蝶。式部。梁雲。貳朱判など云者出て。酒宴の席に興を催しける。其内に京の大盡。文左衛門にむかひ。遊ひの咄になり惣して。女郎と云者ハ恋の出来合。金の光につくハ。江戸も上方も。同じ事なりとの咄。紀文ハ胸に障しか。さわりぬ躰にてめつらしく明日は。吉原へ同道申さんとて。其夜ハ紀文か方に。夜と共に遊ひ⁶あかしける。紀文ハ。都大盡か一言憎しと思ひ。四人の末社を呼。この事をかたり。かよふくと教遣し。直によし原へ遣しける。四人の者は直さま。よし原へいたり。大津や重郎かたへ行て。吉原惣仕舞にし。茶や揚や。遊女屋まで外の客ハ馴染とて断可申。其外菓子や肴や。八百やまで。買きりけり。三人の客ハ。かゝる事ハ夢にもしらす。いつ方へ行ても。金銀さへ遣へハ。用のたる事と思ひ。屋かた船にて面白。酒宴に乗しつ。深川より棹さし。今戸橋へはとなく船も着けれハ迎として舟宿ハ云に不及。茶や。藝者。牽頭。紀文か定紋の羽織⁶小袖を一チように着しつ。出むかへハ紀文ハ舟よりあかり。三人の客をいさなひ。中の町へ至りける。其日ハ常の物日より。めさましき吉原の物揚とて五丁の遊女のこりなく。中



の町の両側の。茶やに簾を卷せて並居つゝ。新造禿に至迄ひとり
 くに。紀文へあいさつなせハ。茶やの夫婦は両かはより。出迎。
 おはやい御出とのあいさつに。京大坂の大しんハ。目を驚紀文か
 茶や。大津やへ上り。夫よりして揚屋尾張やへ到りけれハ。揚屋夫
 婦も立むかいかれ是とするうち。五丁の女郎皆々揚やへ來り。酒宴
 を催し三人の客を饗しける」⁷ 【挿絵第二回】⁷ 三人の客ハ。相應
 なる女郎あぐへしと。おのゝか茶やへ申けれとも。今日は紀文様
 の惣揚ゆへ。此五丁町に女郎とてハ一人も無て。其外御看。御
 菓子等にも。差上たくハ候へとも。皆不殘紀文様に買上られ。何
 一ツ。さし上へきよう無之と。氣毒なから茶やの亭主ハ断いへハ。
 三人の大盡ハおゝきにせきのほせ。いかに紀文かそうあけなれハと
 て。金子さへ出しなハ。其働の出來ぬと云事。有べからすと以の
 外にはら立ける。茶やハとかく金銀ハ山に積ても。今日ハ紀文様へ
 御断おゝせられされハ。私ともとても御客にハ仕かたし。御金ハほ
 しく候へとも。紀文様のかいきり」⁸ なれハ。是非もなし。宝の山
 に入て空かえるとハ。かゝる事をや申らんと。氣毒あまりて申けれ
 ハ。三人の客ハ。是非なく。其夜空。貸座敷へ帰らんと立出しか。
 竹輿を申付へしと。茶やへ言付候へども。是又紀文様の御買上ゆへ。
 田町。山谷。聖天町。みのわ。金杖。小塚原。すべて浅草十八丁に。
 駕と申ハ一丁も無之といへハ。三人ハいよくきもをつぶし。今ハ
 是非なく堀に行。舟を出せと言付れとも。今日は紀文様の買上ゆへ。
 一艘も出しがたしと言により。三人の客ハ詮方つき。顔を見合。紀
 文にしつけれ。思ぬ目に合し口おしき。いか、せんと云つゝ。
 我家へ帰ける」⁹ 去るにても此仕かやしに。何かせんと。工夫をな
 しけれと。いかほと金銀まくとも。是につゝへきよふなけれハ。

三人の大盡は。いそぎ京大坂へ登りける。一蝶ハ。多賀長湖といへるものにて百人男と云事を画けり。後嶋より帰。英一蝶と改名し。浅妻舟と云画をかきける。其辞に。

浅妻舟のあさましやア、又の夜はたれに契をかわして

ほんに枕はづかし我床の山よしそれとても世の中

今世に弄。道中双六は是も一蝶の作也

三浦や小紫 貞操之事 付 平井氏悪逆 井 比翼塚及八重梅之事

今ハむかし延宝の比。京町一丁目三浦やか内に。小紫と云し松位有しに。其比又平井氏と云せ者有。彼ハもと中国筋の家中にて。歴々の子息なりしか。いさゝかの事にて人を討。国を立退。其身。十七の年江戸へ北下り。もとよりも知音近付もなけれハ。幡随院長兵衛と云へる男伊達と因。もとより。美少年の事なれハ彼が弟ふんとなりて。あまたの男伊達を友として暮しけり。或日唐犬権兵衛。真虫次兵衛。放駒。四郎兵衛と。連立初てよし原見物に來りけるに。10「多かる遊君の中に。いかなる悪縁にや。此小紫を見初てより。思ひのほむら。胸を焦し。煩悩の犬の打とも去ぬみやまし。初て枕をかわしまの。流によどむうたかたのかつきえ。かつむすふ。契のむつ言も数つもり平井ハ浪人の身。世に立交る人だにも遊所の金にハつまる習ひ。據なく今ハはや。土手八丁ハ云に及ばず。本郷丸山。御茶の水。小日向牛込法眼坂。金杖辺にて往來の人を切殺し。奪取たる無間の金。年立に順馴染かさなる小紫。光る源氏と呼れつ。日夜に通揚や町。切取したる金銀も。心にまかせぬ身の奢。熊谷堤にて絹賣を切殺し。奪取たる」10三百兩。跡

をくらまし失にける。去とも天の網退かたく終に其身ハ網代の魚鈴ヶ森の朝の露と消にけるを幡随意院長兵衛ハ昔のよしみを思ひつ。鳶鳥のはみ残したるし、むら拾ひ集て目黒なる何寺といへる風呂やへ葬。遣しけるしかるに平井が初七日にいとやさしき女性一人供。獨を召連來みつからハ小紫と申者也平井とのとハ訳有身去年の秋中年季も明箕輪の親の許にさむらいしが承ハ平井殿のなきからハ御寺におさめられ御とむらい被下候よし難有御事なり墓もふてのため参詣申候とて岩つ、しと云名香一包香奠として金十兩」11差出し御廻向ねかへハ彼寺の住職隨川和尚ハおとろかれ誠に奇特千萬なりいさゝ御廻向なさるへしと墓所へ同道し給ひけるいかなれハ斯歴々の人の子の誰廻向する人もなくかわり果たる一掬の塚まだ石塔も建ざりけるに香炉をかり敷物しかせしばらく爰にて御經讀誦。仕。御廻向申手向たく候へハ師の坊様にハ御退窟も候はんと断言ハ隨川和尚ハ箕輪とやらん迄ハ遙の道何なしとも出來合の齋しんずべしとて寺へ入れける扱召連たる供の男にハ我身御經どくしゆの内ハ御寺へ行て休むへしと暇とらせ其身ハ閻伽の」11水を手向普門品を高くとよみける其後はおともなしほどなく隨川和尚立出こなたへ來り給へと墓所の方を見てあれハ小むらさきハうつむせに臥て居けるま、立寄見れハいつの間にか懷銀のんとにつきたてあけに染てぞふしにけるにぞきもをけしいそぎ供の男を呼て是を見せ早速箕輪の親もと幡随意院長兵衛がもとへ人をはしらせ云遣りけるにふた親并に長兵衛もはせ來和尚に様子をき、かえらぬ事をくりかいし子を先立し悲よきにとむらい給れとの願に長兵衛ハす、み出小むらさきか心てい末代の咄の種」12貞女のみさほありかたし権八と一所に葬つかはさは互に成仏うたかひなしとて印に連理

の橘を植青めの石に笹りんどう丸に井の字の二ツ紋二人か俗名書し
るし末世に残す比翼塚とて目黒行人坂の西の方冷光寺といへる
虚無僧寺に印を今に残しける扱其比世上はやりし八重梅と云はやり
唄ハ二人がうたい出しけるなり因にこゝに記おき侍る

八重梅

我ハ野に咲つゝしの花よ折ハとくおれちらぬ間に

我ハ野にすむ蛩の虫よ土手の松明火をともす」^{12ウ}

逢た見たさハ飛たつばかり籠の鳥かやうらめしやさんさ

よしの思ひ

是を八重梅と号其比人々唄し也」^{13オ}

烟花清談之三

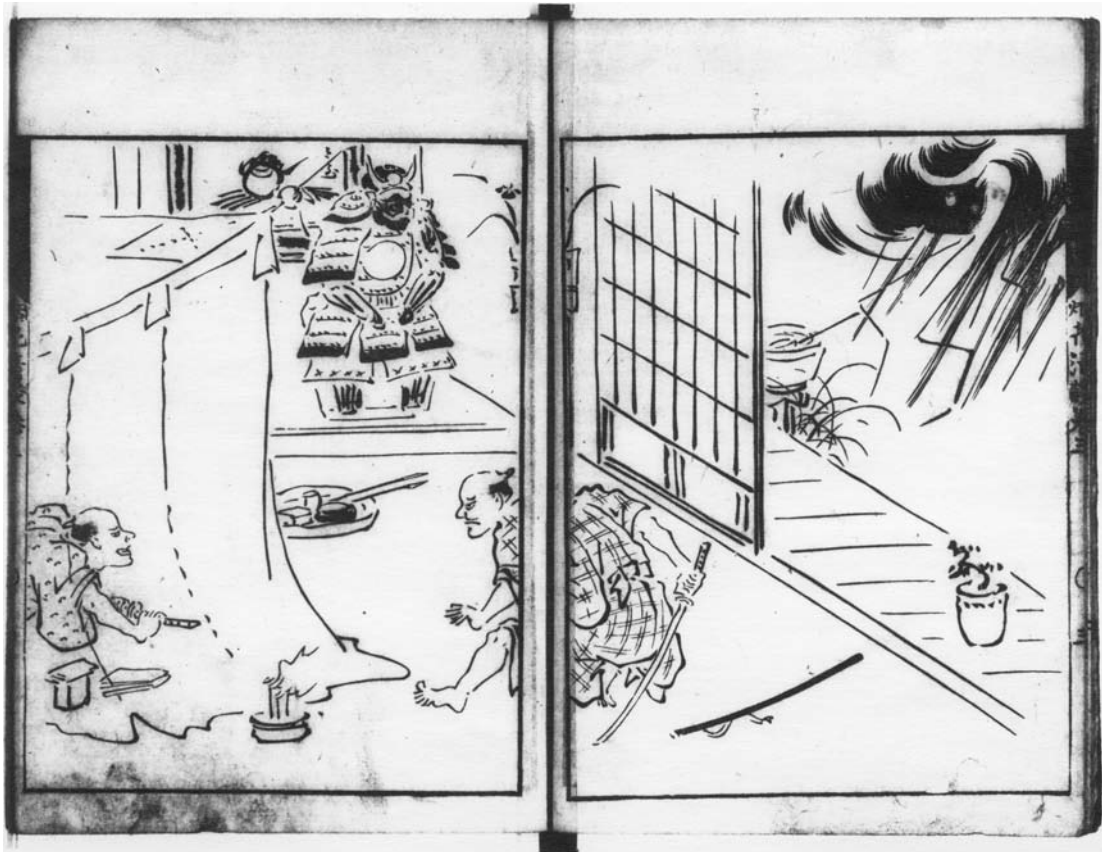
山本や秋篠敵打の始末之事

今はむかし。京町貳丁目山本やかもとに。秋篠といへる遊女有其人
となり端正にして験の美しき事。蓮蓋の鮮なるか如し眼は秋水のう
るほへるか如く。常娥月宮を離。飛燕新粧に倚。面影もかくや有け
ん。おゝ、かる客の中に四國の太守の御内に。宮津何某とかや云し人
有けるか。代々緑をかさねていと目出たく栄時めきけるに。比し
も空さへ暑きと詠せし水無月のはしめ家内の人々は聊。心さしの日
とて。近き邊の山寺へ「仏参せり。何某ハ老人の若黨要介といへ
るを相手として。今日ハ幸家内も留守にて静なれハ。家の重器を
虫干せんとて具足櫃取出してかさり。自は珍筆の上に一盃の冷酒に

三伏の暑を忘。おもわす一睡をもよをしけるうち。雲騰風起て迅
雷の音しきりに鳴ける。何某ハもとより雷をおそれ平日雷鳴時ハ
怖おのゝき小児のおそるゝか如し。況や家内の留守なれば一しほ
心細要助に頼釣せ。夜着引かぶり。枕本にハ要介に宿直させ。
日比念する観音の妙智力をそ祈ける。此要助といへる若黨。年比
正直実躰なる生質ゆへ。何某も一しほ目をかけ召仕」^{1ウ}けれハ。
雷の霽を念し居ける猶降しきる白雨の雷いよくつよく。雷光眼
をさへきり。空怖き折から。いかなる天魔の所為にや。又ハ下郎
の悲しきハ。床にかさりし具足櫃にたしなみ入置し。軍用金を取前
ちらと見しに欲心きざし烈き雷の響を幸と拔足して。具足櫃へかゝ
りける折から何某ハ一心に観音經を夜着の内にて。讀誦なし外の
様子を夜着の内よりうかふとハ。要介は心付す既に金子を奪とら
んとせし時。夜着の内より聲をかけけれハ心得たりと云まゝ。枕本
の主人の刀拔よりはやく頼の釣手を切放し。返す刀に何某をたゝ
みかけて切倒しけるか。何某も」^{2オ}枕本の脇差ぬきはなし。頼の内
より突けるか。耳の脇三四寸斗きつ先はづれに突けるか。要介は事
ともせず。猶踏込て打太刀に終にはかなく也にける。要介ハとゝめ
もさゝす。軍用金を盗取り。あとをくらまし失にける然るに白雨のな
らいなれハ雨もおやみ。雷も霽家内の人々ハ夢にもしらす。寺より
帰り座敷にいたり見れハ。主人ハあけに染て打たをれ。ぬきし刀も
其儘に有けれハ。これハくと斗にて。誰に様子をとふべきやうも
なかりけり。内室ハ狂氣のこどく早速死骸に抱付。こハそも誰か
仕業そや。敵ハいつくの人なるそや。要介ハいつくにぞと。尋ても
見へされハ。詮方なくとやせんかくやと」^{2ウ}家内の。男女ハあとや
先空しき。骸にいたきつき泣より外のことそなきかくてあるへきに

あらされハ。死骸かたつけんとせし折から。幽に通ふ呼吸の様子に。皆々悦氣付をあたへ呼びつけられハ。眼をひらきくるしきいきをほつとつき。妻子の顔を打守扱々むねん口おしや。我幼少より雷をおそれ。生得未練の心ゆへ斯やみくと要介めに討し事の。心外さうと有し次才を。つくづくに語きかせ。無念の泪にしつみけるか。鳥のまさに死なんとするとき。其鳴声悲み。人の死んとする時其言ことよし。幼けれとも世伴勘次郎能聞べし。我おもわすも運盡下郎の手にかゝり。空なりなハ。汝さそ力なかるへし。去ながら母を頼に。成長³なし。要介めを尋出し。討て我忘執を晴すべし。おまきも今より随分勘次郎を大切にそたて。敵を討せ給らハ。我なき跡のとひ吊に。百倍まさる追善そと。言置事も跡や先今は頼も切果たり。是非もなく無骸ハ。夕の煙となしにける。然るに太守此よし聞し召。ふかいなき何某か有様とて。家内ハ關所になり。おまきハおさなき勘次郎を引連。奈良の邊にしろへの有しま。立越てならわぬ賃亭に御車の廻る月日を暮すうち。勘次郎十六歳の春。おまき持病の癩つよく發り。色くくと養生するうち。年比日頃の勞にや。段々と差發り。今ハの際に成にける。時。勘次郎を枕本³へよひ。泪とともに云けるハ。何某殿にわかれまいらせてより。そなたを人となしぬるを。神や仏に祈つ、はやく敵を討せんと。明暮祈り侍りに。ことしハもはや十六の前髪とらせ。敵の行衛も尋んと思ひの外。我身の命もかけろふの。あしたをまたぬ此疾。長き別となりぬへし。是も定まる世の約束。悔てかへらぬ事ながら。我なき跡の吊より。早此地を立去て前髪とりて人となり。遠き東の果までも。敵の有家を尋出し。本望とけて亡父の。しゆらの忘執はらし給へ。是孝行の才一そや。必々母に別を悲みて。未練の心

を起しつ。諸人にうとまれ給ふまし。伝聞唐の何某ハ。父を悪虎にとられつ。何卒敵を討へしと。⁴【挿絵第三回】^{4.5}ある夕暮の事なりしに弓矢たつさへ遠近のたつきもしらぬ山中を父をくらし悪虎を尋。爰やかしこと見まわせしに。木陰に臥たる虎のかたち。待もふけたる梓弓。しはしかためて放矢の。羽ぶくらせめて立けるま。立寄見れハ大石なり。是孝行の一心そや。其心をハよみ歌に石にたつ矢もあるものを。なと念力のと、かざるへきと。よみしも人のおしえなり。思へハく我身ほど。果報つたなき者ハなし七ツの年に父に別人の情に母諸とも。國を離て奈良坂やこのてかしわのふたおもて。とにもかくにも父母に。薄き縁この行すゑを随分と仏や神に祈つ、本望とけて捨れし宮津の家を起し。此悲を。むかし語となし給へ。必く母か別を悲て。くに病煩給ふなよ。さわくなからあすよりハ。誰を力に暮すらんとおもき枕をもたけつ。泪と共に語うち。痰火に咳入胸くるしみ。次才くいたのみなく。さしこむ癩にあへなくも眠る如く引とるいき。勘次郎ハ只忙然と。泣もなかれす悲に。母の死骸にすがりつき。共に死んと思ひしか。又思ひ直し母の教訓亡父の。遺言かたくならぬ身の上と。親子人々頼つ。母の亡骸煙となし。七日くの吊も。心斗の供養をとげ。扱しも母の教にまかせ。自前髪剃落。今迄因し劍術の師荻原一角か本へ立越へ。今迄ハ彼是と幼より。御世話になり。御恩はさらく忘ハ置じ去ながら。母の今はの教にまかせ。吾妻の方へ立越少のしるへ候えは。是を頼奉公を梓申たく候へハ御暇乞に参しと。云ハ一角も年月馴染し不便さに。未年はもゆかぬ身の。海山越ての長の旅。其上あてなき奉公梓。きとくにも候へハ。我家に傳陰陽二ツの太刀有。當年ハ免許へしと。兼てハ思ひ居たる内。母御



の忌にて延引せり。今日幸免許へしとて身を清め。二ツの太刀筋
 おしえつ、汝か門出を餞別せんとして。卜筮とり出し卦を儲。横手
 を打て申よう。今筮し得たる所の卦ハ。雷地豫雷ハ百里を轟し⁶
 軍を行に利有。是蜀の諸葛孔明。南蠻を征せし時。筮し得たる卦
 なり。目出度旅行の門出そや。とくく用意有へしとて。盃出し
 寿をなし。門送りして別けり。夫よりして勘次郎。我家に帰り見く
 るしきもの取片付。心易人々にいとま乞つ、鶏が鳴東の方へいそ
 きける。日数つもりて名にしおふ。花のお江戸や日本橋。浅草寺の
 こなたなる。猿屋町と云所に。少のしるへを頼つ、あやしきはに
 ふをいとなみて鍛術指南夜講釈に其日の煙をたてにける。夫より
 して敵の様子爰やかしこと何うち門才もお、く付日に随て繁昌せ
 り。しかりとハいへとも敵の様子もしれされ。」⁷ハとやせんかくと。
 案し煩いつとなく。煩出し枕にハふさねとも。常く煩かち也けり。
 とり分心易門才中集て。先生の斯煩かちなるハ。未壮年にもなり
 給わて。武術に心をゆだね給ふゆえなるへし。心なくさめ申さんと。
 一両輩もよをしつ、。近き浅草観世音れいけんあらたに侍へハ。い
 さまいらせ給へやと。よきなく誘ふに詮方なく。ともに連立詣つ、。
 南無婦命大悲尊ねかわくハ敵要介に。めぐり合せたひ給へと。丹誠
 無二に祈つ、。猶爰かしこ巡礼し裏門通へいたりつ、。明王院の
 姥か池。是一家の旧跡と。人のおしえに立寄て夫よりいそく花川
 戸。⁷たれか待乳の山ちかく。夕越て行ハ忽に。あふさきさるさのか
 しあみ笠。あるひハ頭巾眉深く。堤八丁ゆくとなく。あゆむとな
 しに。衣紋坂。大門口に入相の。かねてハかゝるへしそともおもわ
 すしらす。さそはれて中の町まち合の辻に至りて見てめれハ。お、
 くの女郎の揚屋入。空も花に酔心地にて。勘次郎ハ只忙然と。桃原

に入しむかしかたり。張文生か仙女に逢しことく。始て見たる花街のよふす。門才中ハそれ／＼に馴染の遊君ありけれハ。いさこなたへとす、むれと。一きは目たつ八文字。此山本の秋篠か。はでならぬおもかけに。心をうつした、すむを無理にいきなひ。とある茶やへ同道し。こよひのやとりハ」先生のおこ、ろまかせと進れとも。さすか心にはち紅葉。色に出にける秋篠や。外山の里にあらねとも。かの山本かもとへならハ。一夜の契をハかはしてほしき風情をつ、むとすれと。糸薄ほにあらわる、面影を。むりに進て初恋の。測とやならんみな川の川。けふの逢瀬をみなかはに。はやくみかはす盃の。かすかさなりて床の山雲となり。雨となる楚王の夢をそむすひける。秋篠も勘次郎か面さしに。心をうこかし明行鐘を恨つ、心ならずも勘次郎ハ。皆々にもよをされて猿や町へ帰しか。猶秋篠か面影の。わすれやられす。其夜ハ独ひそかにおもむき。夫よりしてハ門才の人目の関もつ、ましく。來」夜も忍ふあみ笠に姿をかくしかよひける。今ハ中／＼秋しのがまことの心に引されて。有にし父の敵のことも露おもはて。一とせほとハかよひしに。ある夜の夢に過去し。母の姿を幻の打うらみたる顔はせにて。やよ勘次郎故郷にて誓ひし事ハ忘れしと。さもあり／＼と見しゆめにおとろかさされておき上り。見れハまさしき佛の幻のとおもはれて。燈火かすかに三更の鐘の響かすかに聞ゆ。勘次郎ハ忽に手水うかいにみを清め。燈明照し両親の位牌に香をてんしつ、。いますかことくかうへをたれて放蕩を侘奉り不孝の罪をさんけせり明れハさつそく山本かかたへ行。秋篠」【挿絵第四図】にあい今までハふしきのゑんにてかく馴染をかさぬるも宿世のゑにし有ゆへなりさハさりなからわかみハ願のある者ゆへこれよりおくのかたへたちこゑんま、亦の逢よもは

かりかねこよひはかりの名こりなりいつをかきりのなきみのねかひみらいハかならず一ツはちすの契をハかならずたかはせ給ふなどしほ／＼とかたりけれハ秋篠ハきもをけしなくもなけれぬおもひのたね勘次郎か顔つく／＼とうち守りかりそめにまみへしより互につもる枕のかす未来をかけて契らんとおもひの外なる御おしへとてもそなた様に別てハ何たのしみになからへんさるにても御みのねかひとお、せられんハ」いかなることにて侍らふそや。年月なじみしか身に今までつ、みおわせしハうらめしく侍らふとかきくとけハ。今さら何をかかくし侍はん。我か父ハ宮津何某とて。四國の太守にみやつかひして有しか。我身七ツのとしあへなく討れしむかし語。かたるも今さら口おしく。其上敵の面ていハ幼、心に覚へ侍はねと。むこふ齒かけて額の黒子。右のこびんに刀の突きす有と。母のおしえとし月尋さむらへとも。似た佛の人にもあはず。無念の月日を暮す内。いかなるゑんかそなたに逢初か、る別に及こと。過去宿執の因縁なるへし。必く我運つよく敵にめぐり合。首尾よく敵を討お、せハ又の契を結へし。もし又かへり討にもなりしときかハ。一へんの廻向もたのむと斗に涙くみての物語秋篠もなきいりしが。おとろきいりし御身の上爰に一ツのはなしあり。此一二年この方 聖天町より來ル。醫師に徳嶋泰庵といふ者あり。つね／＼内證へ來り給ふか今御はなしの向齒かけて額の黒子。右の耳わき二三寸きずの見へ侍ふか。今ハ四方かみにて或ハ十種香はいかに折／＼内へ見へ給ふ。もし是にても侍ふやとはなせバ。勘次ハ飛たつことく。浮木に逢る盲龜のおもひしからハそなた手引して其かつかうを見せ給へとたのめハ幸」明日は口切にて。大勢客衆も侍へは泰庵とのもまいるへし。必く明晩と契て其夜ハかへりけり。扱



勘次郎ハ我家へ帰り其夜のあくるをまち居たるに。千夜を一夜の心地にて明れハはやく支度山本へおもむき。秋篠に逢かたきのよふすをうかゝゐけるに。山本かかたにハけふハ自門他門の両三輩を招き。初座の鱈炙より。中立後座の點茶までことごとく畢る比。秋篠は勘次郎を連たち内證の廁へともなふ躰にて。障子に穴をあけ敵のよふすを伺せけり。勘次郎ハ一目見るより飛たつことく思ひしか。無念のむねをおさへつ、秋篠諸とも二階へ上り。いよくかたきに相違なしと。12オ明朝のかえるさを付行。名乗あい勝負をせんと。其夜おあかし泰庵か帰さを跡より付て行けるに。所ハ待乳山の麓にて。聖天町の。表ハ格子作りなる内へ這入を。押續て入。いかに泰庵見忘れしか。我こそ宮津勘次郎汝父を討しより。無念のとし月尋くらし漸夜分見出し故。是までしたひ來りたり。いざ尋常に勝負あれと。身こしらへして詰かくれハ。泰庵ハさしたる脇差投出し。勘次郎か顔を。見あげみおろし。つくく見て。孝なる哉勇なる哉おもひ出せハ。二むかし自若氣の不了簡欲に眼もくらやみて。御主を害し奉り。奪ひし金ハ水の淡12ウなすことする事左まへ詮方つきて東へ下り容をかへて鍼醫となり漸月日を送るうち我ハ忍ふとおもへとも天命のかれす今君に奉逢ハ即主人の御罰御心せかすと御手にかゝりせめてハ罪障消滅せん扱々わすかの年月にいとけなける御成長爰ハ市中の事なれハ是より近き邊に浅茅か原と申所の侍へハこよひそれへ御供なし御手にかゝり侍はんといとおとなしやかに答けるま、勘二郎ハさるや町へ人をやり門弟兩人呼寄泰庵を守護させ其身ハさるや町へかへり支度をなしてよし原へ立寄秋篠に逢敵要介に名乗合こよひ浅茅か原にて敵を討につけて13オいとま乞に來りたり何かとそなたの眞實ゆへ思ふ敵にめぐり合本望とくるハ案のう

ちさりなから若運盡て返討にもなりしときかハ無跡の廻向を頼と言
 けれハ秋篠ハもつての外にはらをたて扱々ふかいなき御心かな親の
 敵を見出しなからみつからへいとま乞とハみれんなる思召かなとて
 も其心にてハ敵も大かた討得給ふまし是非もなき御事と泪にくれて
 恥しむれハ勘次郎は今更にかへすことはも泪ながら立帰浅茅か原
 へいたりて見れと敵の影もなしとしゃおそしと待うちにも西山に
 うすつく比敵泰庵ハ二人の才子にいさなはれつ、出来れハ勘次郎ハ
 声^{13ウ}をかけ支度も能ハとくくと言ハ泰庵もも、引たすきに身を
 かため互に別て西東まいりそふと声かけ合互に手練の太刀先に勝負
 もいまたつかさりしにいか、ハしけん勘二郎請太刀になりてたしろ
 けハ思ひもかけぬ松陰より黒装束にあみ笠着たる若侍後の方へ廻
 ると見へしか拔よりはやく泰庵か右のかいなを打おとしけれハ勘次
 郎ハ踏込て大袈裟に切たをしと、めをさし父生霊頓生菩提かたき
 要介か首請取給へと廻向をなして手向けりかくて人々ハ悦いさみ介
 太刀打し人に向いかななる方なれハ思ひもかけぬ御介太刀に預り忝し
 去るにても御名ゆかし候と^{14オ}いんきんにてをつけハいせん侍
 近々とあみ笠とるを見てあれハ山本やの秋篠なり是ハく々と皆々お
 ころきふしんをなせは先ほど勘次郎様いとま乞に見へ給ひしをはち
 しめまいらせしも心をはけまし申さんため心の外のあいそつかしを
 申せしなり夫よりしてみつからハ親かたへ寺まいりとて暇をもらい
 心安き茶やを頼中宿をこしらへ身こしらへして是迄参侍しに心と、
 き首尾よく年月の本望をとけさせ候何よりめてたふ侍ふと悦いさむ
 其中に勘二郎ハ秋篠にむかい只今の心さしと云はたらきと云武士も
 及はぬけなけのふるまい流に沈し川竹のうきふししけき其中にたく
 ひ^{14ウ}まれなる志さるにても御身の上からばしくわしくかたり給へ

と云へハ秋篠ハ顔うち赤め恥しなからみつからか父上ハさるやんこ
 となき御方に世々禄をかさねて侍りしに傍輩のさんにより思はずい
 とま給りて二君に仕へぬ市中の閑居年月をくる其中に母の大病せん
 かたなくみつからか十二のとしこの荆棘林に賣れしにはしめハ父母
 の事のみ思ひ出し明暮恋しかりしか稚き心のおるかさハ日毎に媚に
 馴花やかなる人の出入たち振舞も羨敷いつしか芝蘭の室ならぬ
 荆棘の林に棲て其香に染ぬるそ浅ましき一夜を限に去てふた、ひ來
 らさるも多き中にいかな^{15オ}る宿世の奇縁にやそもし様にふと馴そ
 めまいらせ御身の上を聞に付いと、いやます思ひのたね扱こそ斯ハ
 はからいしそやそれハともあれ年月の御苦勞ありしかひ有て御本望
 をとけ給ひいか斗か悦し此上わへんしもはやく御國元へいそかせ給
 へと進られ勘次郎ハ日比の情此場の時宜今更何と云へき言葉もなく
 只何事も國元へ立帰迎の人を差越へしといとま乞もそこくにし
 て立別馴し故郷へ立帰敵討の始終を太守へ申上しかハやかて本地
 に立かへり再び宮津の家名を起し秋篠事も身請をなし玉椿の八千代
 をかけて榮けり

烟花清談四目録

- 化物桐や奇怪之事
- 万字や禿馴二怪童一遊事
- 茗荷や大岸以智防一誹事
- 三浦や花鳥菱や通路争二全盛一事
- 大上総や常夏迷魂之事
- 奈良や茂左衛門欺レ友事
- 松や八兵衛以レ戲奪レ金事」目^オ「目^ウ

烟華清談
 化物桐屋怪異之事

今ハむかし。揚や町の河岸に桐や何某とかや云し娼家ありける此あ
 るじ抱の娼婦と密に通しけるか。初の程ハかり初の事なりしか。い
 つのほどより筑波山の影しけく。人目の関にかゝるほとなれハ。
 女房もほど此事をしりて。しんゐのほむら胸を焦し。何かにつけて
 此遊女を憎み。難波の浦ならぬよしあしに罵はつかしめけるが。猶
 たらすや有けん。外の娼家へ賣やらんと云しを。あるしハ是を許さ
 「ッ」れハいよ／＼しんゐいやまして。後ハ此遊女を見る目もいふせ
 き心地にて明し暮しけるか。いつのほどよりか思ひの火に胸を焦し。
 人しらぬ病の床に打臥けるか。日「増思ひいやまし。あるしハ是
 を幸にいよ／＼馴むすひけれハ今ハ中／＼たすかるへくもなく。終
 に無常の道におもむきける。扱しもあるへきに非ハ野辺の送りに
 人々袖をしほりけるあるしハ今更打驚き。仏前にはみあかしをて
 らし関枷の水を妻の位牌にそなへ香花を供し。念仏いとまめやかに
 唱つ、手向し水をとりにかえんとて。見れハ茶碗に水少しもなし。こ
 ハそも不思議と水を手向かへ其夜ハ其儘に休ぬ。夜明て又香花を手
 向水むけんとするに又水なし。人々いよ／＼不思議をなす事初七日
 まで毎夜かはる事なし。あるしも何とやみん氣味わるく覚へけれハ
 初七日の法事もいと念比吊ひけりしかりしより後は「夜更るにし
 たかひ。いつくともなく女のさめ／＼と泣聲しきりにして声もの悲
 しく。姿ハ更に見ゆる支なし。或ハ座敷へ出せる盃硯蓋など蝶鳥な
 んとの如く中を舞ありく。ある時は銚子かなへのいつくともなく
 畳の上を走。いろ／＼怪事を見なからも煩惱の犬立さらす。終にか
 の遊女を後妻になん定めける。然りしより猶さま／＼の怪お、きう

ち。水無月の比先妻の衣裳を虫干せんと。箆の引出しをぬかんと
 なしける折から。箆の内よりも物悲しげなる聲にて我か衣裳は干
 に及すと云へる聲に。後妻ハ魂きへ打倒れしを。家内打寄介抱して
 さま／＼いたわるといへとも。「終に病となりてほとなく果ぬ。夫
 より無程身上衰へぬ。是を揚屋町の化物桐やと其比人々云ぬ

萬字や禿怪に馴事

今ハむかし。なんならぬ京町に万字やと云娼家ありける。かれか
 もとにかん竹と云禿あり。いつしか長月井か比よの中物静なる比。
 小雨しきり降。長き夜のいと淋しく。客禿人もなく。時雨をいそ
 く風の音信のみにて。夜も初更の比。かん竹ハ用事ありて二階へ行
 けるに。見馴さる十あまりなる禿。かん竹か袖を引て。奥座鋪へと
 もない行ぬ。かん竹も何心なく行しに。「かの禿、袂より小き石を
 とり出し。手玉はしきなとするま、かん竹もとも／＼遊戯る、うち。
 ほとなく見せよりかん竹を呼けるま、見せへ行て姉女郎の用事を弁
 し。又候二階へ上りけれハ。階子の口にかの禿待請て。又々かん竹
 か袖をひかへて奥座敷へともない行ぬ。只ものハいはすして。石な
 とをとり遊ひ戯る、事毎夜なり。後ハかん竹も見せの出るを待て。
 かの禿と遊ん事を楽み。見せ出ぬれハかの禿階子の口に待受て居事
 常也。あるし夫婦かん竹か見せ出ぬると。外の禿とかはり二階へ上
 る事をいとふしんにおもひ。或日かん竹にとひけれハ。二階へ玉取
 に行とことふ。外の子供は「皆／＼下に居るに。だれを相手にす
 るやといへハ。過し比よりのあらましを語ぬ。夫婦あやしみて鴛母
 若い者に付させ見するに。かの禿出る事なし。又々かん竹独いた

れ八即出ぬ。客到れハ出る事なし。斯する事一とせ斗にして後。或夜かん竹かの禿か手をとらへ二階より引おろさんとせしに。かの禿かん竹か襟へ喰付けるに。かん竹あつとさげ倒けるに。件の禿いつちへ行けんかしらす。其聲におとろき人々立寄見れハ。かん竹ハきをうしなひけるを介抱なして。よふくと人心地なりぬ。少しのきずなれハほとなく快よくなり。成長して猶又勤居れり。」

茗荷や大岸以レ智防レ誹事

今ハむかし。享保の比京町二丁目茗荷やに。大岸といへる遊女あり。つねに風流を好又酒宴を愛。つねく客の帰を送てハ中の町の茶やに牽頭藝者を。集て相手とし。夜終の酒宴に更行鐘を恨。月雪花の晨ハ更也。其身の座敷とても昼夜のわかちなく。茶や舟宿。又ハ。牽頭をまねき。夜ととも酒宴に。おのつからうはきの名を立られ。五丁の口の葉にかゝり。大岸ハ色好にてれん女郎とハよびける。しかありしより。大岸に心易茶や。此事を告てとりくに「⁴昇見ましりに云きかせける。折から年の暮なりけるか。來る年の正月ハ跡着も一しほさはやかに。下着は不残白無垢を着し。上着ハ。白襦子に金糸を以て卒土婆としやれかふへ野さらしの形を縫せて着し。又挑灯にハ大文字にて。てれんいつはりなしと書せけり。茗荷やのあるし鴉母らハそもいかにと云けれハ。大岸言けるハ。我身はてれんのはきものとの噂あるよし。此身ハてれんのはきにてハなく。只楽につとめのうさを忘るゝまてなり。訳しらぬ者の口の葉にかゝりしゆへ。かくハはからい侍ふと語りつゝ。やはり挑灯」⁴の紋。てれんいつはりなしの文字ハ。其まゝにてともさせけるに。

物めづらしき評判いやまして。日に増全盛ならぶかたなく。終に浮氣のあだ名も云人なく今以其膽量を人々感じぬ。

三浦や花鳥大菱やかよひ路争全盛事

今ハむかし京町壱丁目。三浦やノ内に。花鳥といへる遊女あり。同し二丁目大菱やかもとに。かよひ路といへる娼君有。互に全盛の身なりしか。いかゝしけん花鳥か方其年の暮。客よりおくる仕舞金。いつかうに來らされハ。正月の跡着の趣向も心にかます。かのかよひ路かよふ姿を聞合するに。下着ハ。なをりの紅羽二重のむくに⁵上着ハ。緋縮緬にして。錦あるひはから織。唐花布。蝦夷にしきなどの。多葉古入。烟管袋を。いとにて繋合せて鳥の羽をかさねたるよふになし。是を模様につけ中の町へ出て。揚屋へ赴んとする道中にて。袖褌を引ハ。烟袋させるつゝの。手に随てとれるを趣向となしぬるよしを。密に人の告けるを聞とも。こなたには。せん方なく。下着は白むくにて。上に黒襦子の火打入たる紙衣をこしらへ。春を迎んとしけるに。大晦日明方。客のかたより金二百両を送りけれともはや跡着の間にもあわす。せんなき事と思ふうちにほとなく年礼に中の町へ出ける。しかるにかよひ路ハ。新町より⁵爰を晴と出けれハ。茶やの下女若い者。或ハむすめ。むすこまで。御めてたふ御座りますと。袖つまを引て。たはこ入烟管袋を。引とりけれハ揚屋町の角にてハ。帯つけ打かけの。たはこ入させるつゝ、一もなく。無地の緋縮緬となりけれハ。其儘帯つけのしこきをときて。下着斗となりて揚やへ入ぬ帯付打かけハ揚屋町の角に打捨置ぬ。人々其活達を感じけるに。花鳥ハ紙衣姿にて揚やを出。



大門の茶やに至り。松やか見せて五丁の藝者牽頭を集めて酒宴をなし禿を呼て何か秘語けれハ。ほとなく禿ハ何か紫の服紗に包し物を持來けるを花鳥ハてに、もふれす。あるしによろしく頼とて渡しける⁶。【挿絵第五圖】⁶⁷ハ彼の百両のこかねにてそ有けるを。藝者牽頭下女若い者までにとらせ終夜松やかもとに遊びて帰ぬ

奈良や茂左衛門欺レ友事

今ハむかし。奈良や茂左衛門と云し者あり専柳巷に遊び任俠を好。一時に千金をなけうちて快しとす。其比紀文と一雙の大盡にして三浦やの。しか崎か方へかよひけり。或日尾張やの揚やに遊び居けるに。和泉やの揚やに念比なる友。五人遊び居けるか。奈良茂か事を何かあしさまに云けるよし。人の咄にほの聞けるか。奈良茂ハさはらぬていてけんどん蕎麦五人前おくり遣しけるにそ。かの五人ハ。花やか⁷に遊び居ける所なれハ。奈良茂かいたつらにくさも憎しとて。こなたよりもけんどん。澤山に送りてこまらすへしとて。中の町の蕎麦やへ人を遣りて。出來次才百人前。尾張やの揚やへおくるへしと云へハ。こよひハ蕎麦を賣切たりと云。しからハとて。五丁の蕎麦やへあつらゆれとも。皆々賣切たりと答。五人の客これハけしからぬ事なり。田町山谷の蕎麦やへ人はしをかけるに。是も賣切たりと云ゆへ。山の宿聖天町。花川戸材木丁へあつらへしに。是も今宵は賣切たりといへハ。今ハ是非なく。箕輪金杓を尋けるに。是も賣切たりとこたゆ。今宵に限。けしからぬ事なりと使の者ハ。小塚原千住へむけ⁸て行あつらゆれとも。是も賣切たりと云に。扱くあやしき事と。是非なく立返で。茶やの亭主へ斯と云けれハ。

茶やの亭主もいつみやへいたりて。五人の客にしかくのおもむきを咄。今宵一向いつ方にも蕎麦切されるよし云へハ。然ハ何ぞ外にかへしの工夫もあらんと云折から。表の方騒々敷。尾張やよりの送りものなりとて。けんどん箱をつむ事山のことし。千住小塚原箕輪金松。或ハ田町山谷山の宿。花川戸材木丁をはしめとして。五丁のけんどん箱のあるかきり持はこひけるハ。目さましき有様なり。是ハかねて奈良茂より蕎麦やへ人を廻し。賣切けるとかやし崎か假筆にて。ゆるくと御遊ひ候へかしと申越けるよし。扱いつみやにてハ。もらいし蕎麦になんぎしけり。今芝居にて。曾我狂言に。緞子三本紅五疋と云。又ハ大盡舞の言葉に緞子三本紅五疋。綿の代まで添られて。貳枚五両の小脇差と唄ふハ。奈良茂か。しか崎を身請のしらきに。尾張やへ遣しける。おくりもの、事なり

大上總屋常夏執念其巻か勇氣之事

今ハむかし正徳の比かとよ。江戸町老丁目。上總屋に。とこなつ其巻と云娼婦あり。互に其全盛を争ひて。其中睦からず。たとへハ両雄の並たゝさるかことし。然るに。いつの比よりかとこなつ。心地わつらはしく。病の床に臥けるか。遂に日顔色おとろへ。醫療しるしなく。終に朝の露。ときへける。野邊の送いと念頃にとりまかない。悔て帰ぬ事を云あへりて。妹女郎は。親はらからに別し思ひをハなしけり。扱其巻ハ。ありしにまさる全盛。日に増て。家内のもちひもいちろく。とこなつか。棲し座敷を普請きよらかにして。其巻ハかしこへ移りぬ。しかるに。其巻かかたへ客來り盃はしまらんとする時。天井よりはらくと落るものあり。禿若い

者ハ立より見るにさしと云虫なり。是ハ。天井に鼠。又ハ猫などの死骸あるへしとて。明の日人を登せて。天井を見さしめるに。かつて何の子細もなし。又候。其夜も客來りけるに。銀燭の光いと照わたる中へ。天井より又。はらくと落ぬ。彼是よりて取捨ぬれハ。又しはら。く有て落ぬるま。翌日ハ。天井を取放し見れとも子細なし。又の夜もけしからす落けるま。今ハ詮方なく祈禱の札。鳴弦の守を張置けれハ。其後ハ子細もなかりける。然ある後。水無月も過。文月もはや半過る比。雨いと静に降ける夜。其巻かもとへ客來りて。二更の頃帰りけれハ。座敷もいと寂寞として。物淋しく。独燈火のもとに文したゝめて。夜の更るをもしらす。四面虫の声のみにして。窓打雨の音のみきこゆ。其巻ハふとかたはらを見れハ。過去しとこなつかおもかけ。忽然とあらはれ。其巻か顔をつくくと打守り居ける。其巻心におもふにハ。日比むつまじからざるとこなつか。忘執に引され來¹⁰りしものならん。人の咄つたふるハ。かよふなる物に負るときハ。我命を失ふと聞しやと文書さしてこなたよりも。常夏か顔をつくくと見詰居けれハ。其勇氣にや氣を奪れけん次才にとこなつハ。跡へしさりけるま。其巻ハ段々と顔を見詰て。じりりとつけて見けるま。終に姿ハ陽炎の。幻のこくと消ける。夫よりして後は怪事なかりける。

松屋八兵衛欺客之奪金事

今ハむかし。松や八兵衛と云牽頭有。或日。揚や海老やにて。何某とかや云し客。末社牽頭大勢集て遊ひけるか。酒闌なる比。大成¹⁰水鉢出けるを。客ハこの鉢の水をこほさせ。水油を八分目

入させ。扱金子百両を。かの鉢へ入。勝手より。俎箸を取寄。茶
 や舟宿ハ云に不及。牽頭。若い者に至まで呼集。まな箸にて。件の
 小判をはさみ取へし。取得さるものハ。罰酒を飲しめ。取得し者ハ
 とく分と云わし。皆々喜悅の眉をひらき。我とらん。人取らん
 とて。扱とも。はさめとも。水際近くなるまゝに。小判ハすへり
 落。皆々笑つほに入にける。客ハ是を肴に一しほ興に乗しける。松
 八は。何卒これを扱取らんと工とも。手震。拳も定ず。其内壺両。
 よふく取得し者有。小判を紙に包。なをも取らんと扱ける。松八
 は。未一両も取得されハ。いと、思ひを焦しつ。とやせんか
 く¹¹かくやと。心をくるしめるを。客ハいよくゑつほに入て。
 酒蘭に及ける。松八ハ無念さあまり。腹立顔に座を立しを。座中
 ハとつと興しつ。猶々興を催す折から。襖障子にわか響。
 震動する事おひたし。人々ハ肝を消。こハけしからぬ事と思ふう
 ち。家鳴しきりにして。怪しき姿を顕れる。惣身ハ。真黒にして。
 眼ハ星のこどく。椽の下より這出つ。座中を白眼ハ。人々わつと
 たまきるうち。我ハ。松八か忘執の金ゆへ迷ふ一念そと。件の鉢
 へ。両手を入。金子を不残奪取。椽の下へそ入にける。有合者ハ
 云に不及。たれ老人起居る者もなく。皆々腹をかへ笑つほの會
 入にける。¹²

烟花清談之五目錄

- 女術又七幽魂契事
- 雁金屋采女貞操之事
- 角山口香久山贈レ盃事 付リ 月見盃之権輿之事
- 橋本や紅横死之事 付リ 雲中悟二因果一事

- 総角新造江教訓之事
- 巴屋薫金魚弄事」 目オ 目ウ
- 女術亦七幽魂に契事

今ハむかし。揚や町に又七と云る女術ありける。もと京町二丁目
 住し比。年季の明ける遊女有けるか。かの女子遠國の者にや有けん。
 親兄弟も無かりけるや。誰世話する人もなく。又七か方に居ける。
 いつくへも相應ならん方へ嫁し遣はさんと思ふうち。又七も独身の
 閨淋しく。いつとなく人しらぬ中に。雲雨の情をこめ忍ひくにか
 たらひける。然るに此女ふと煩出せしか。終にはかなくなりける。
 又七も今更不便におもひて。無骸ハ自の寺へ送り。一掬の塚のぬし
 とハなしぬ。誰吊人もなけれハ。跡念比に吊ひ。初七日の法事も
 まめやかに勤遣しける。去る者ハ¹日にととき習ひにて今ハ思ひ
 も出さず。日数へけるにある夕暮の事なるに。亦七ハ轉寐の夢をむ
 すひ少しまどろみしか。しきりに悪寒の氣味つよく。ふと目を覚し
 て見けるに。枕元に忽然と件の女。世にありし姿にて居り。又七か
 顔つくく打守 涙くみてぞ居けり。又七ハもとよりも剛氣の生質
 にて。狐 狸の所為ならん。よきなくさみと思ひ。煙艸くゆらせて
 詠居けるに。少しも構はず終夜互に向居けるか。暁 近くなる比。
 勝手の方へ出しか。いつち行けん見へすなりぬ。又七も終夜寐も
 やらされば。其日は勞れ終日 休て。暮比起出て心さす用事とりま
 かなひつ。初更の比我宿へ帰り。戸ほぞ押明見てあれハ。いつの
 比來りけん。又件の¹女來り居ける儘。今宵ハ是非狐 狸の正躰を
 見頭しみると思ひ。何心なき躰にて内へ這入ハ。女ハさしうつむき

て居けるまゝ。こなたへ來り候へとて。手を取けるに。其手の冷なる事。玄冬に氷を握かことし。さしもの又七も心おくれて。持所の手を放し。色々と様見るに。外に可怪事も見へす。食餌を進るといへとも。手にもふれず。もの云挨拶するも平日のこどく。變る事なし。其夜も暁近くいつちへか出けん。姿を見失ひけるまゝ。來る夜ハ宵より待けるか。又二更の比來れり。今宵ハ魚物油揚の類を多焼て。鉢に入。酒などあたゝめてもてなすといへとも。一向口もとへも寄す。せん方なきまゝ。捕んとする」²に。煙をつかむか如く。其姿消もやらず。端然として在。今ハますく詮方なく。社家山伏を招て。盤若理趣分のくり。或ハ鳴絃の札。陀羅尼の神呪を唱れと。露しるしもなし。後ハ隣の人々も是を知りて。或ハ壁を穿て。覗見れとも。曾て容を見る事なく。亦七のみ独燈火の本にて。人にむかいて咄せる容斗にて。更一物の眼にさへさるものなし。斯毎夜來る事一月ほとにて。祈念祈禱も更驗なし。しかるに或老女のおしえけるハ。幽魂の罪障ふかきには。智識の十念又ハ。血脉なとこそしるしハあるものなり。我方に祐天和尚の名号一幅あり。是をかしまいらせんまゝ。今宵試給へとてあたへけるまゝ。又七八是を授り。日の暮をまちけるに。又」²例の女來りける儘。又七ハ件の名号を紙よりにて紐を付。首へかける様にこしらへ置けるを。彼女か襟へかけけれハ。姿は煙の散せる如彷彿として忽消ぬ。明の夜ハ來るかと思へハ來らず。あまりの不思議さに。翌朝旦那寺に至。和尚に右之あらまし物語をなし。塚を見れハ。石塔に件の名号を懸て有けるまゝ。其儘に葬跡念比に吊ひ遣しける夫よりして何の怪事も無かりけり。人々又七を呼で。幽霊又七と異名なしけり

「金や采女貞操之事」

今ハむかし「金や采女」云へる娼家に。采女と云遊女あり。或僧の馴始て通ひけるか。囊中おのつから空しく「金や采女」の家内あや」³【挿繪第六回】^{3,4}しみて。心えなく覺へけれハ。云紛かして逢せさりしかハ此そう思ひに堪かね「金や采女」の格子の中にて。或夜自害して果ぬ。采女ハこの有様を聞て悲の泪。腸断思ひ。炎胸をこかしあるにもあられす。いか、して紛出けん或夜密に。花街を忍出。近きほとり。浅茅か原なる。梅若の母公妙龜尼の身を投し。鏡池へ身を投むなしく成ぬかたはらの松にうつなる衣を懸置うらに一首の和哥有名をそれと知らすともしれ猿沢の跡をか、みか池にしつめバ治業のいにしへ妙音院大政大臣師長公尾州へ左遷給ひ。謫居の寂寞に。たへ給わす。ある女を召れ愛し給ひしか。帰洛の時琵琶一面を与へ」⁴給ふ。かの女別離を悲しみ。測に身を投没す。其時和哥一首を詠

四ツの緒のしらへにかけて三瀬川沈み果しと君につたへよ
 是より此所を。琵琶島と号するよし是采女と同日の談也

角山口香久山瓜生野へ盃を贈事 付リ月見盃之権輿

今ハむかし。宝永の比。角山口に香久山と云へる遊君あり。都嶋原の遊君。瓜生野といへる者かたより。客の縁によりて銀の煙管を文して贈けるか。火皿の穴を中にてつめ。きせるの通らざる様に工なして。贈ける。香具山返事に。大盃のいとそこ」⁵を圓にして。下におくときハころ／＼とこられる様にこしらへ。其名を白菊と



書付。嶋原へ贈ける。是ハおきまとはせる〔と〕いへる。和哥の言葉に託して名付侍る。比しも八月半比なりける。是よりして月見の客へ。盃を贈事とハなりぬ

橋本や紅か横死之事 付 雲中子因果を悟事

今ハむかし。享保比角町橋本やに。紅と云し娼婦あり。かれか方へ何某とかや云しもの、ふの。深馴染。陌頭の楊柳も。日毎に折盡す斗にかよひ。互に膠漆の契ふかく。末の松山⁵波こさしと。月雪花の夕にも。比目鴛鴦を羨。年を重て通ふほとに。父か筐裏をも虚するに至り。終に二人の進退も詮方なく。今ハ黄金用盡て。後。交うとき世の習ひ。鴛若い者に至まで。疎々敷挨拶に。二人はいよく。ます花の散ての名こそかうはしと。よしなき若氣の不了簡に。未来の契を誓つ。利劔則是弥陀号と。紅か胸のあたりを刺通し。南無と斗を此世の名残。終にはかなくなりけり。何某ハ紅か死顔つくり。枕に臥せ。我身も共に一蓮侘生。南無阿弥陀仏と刃逆手に取直し。咽のあたりを搔切しか。愛着の念にや。心おくれけん。手の内狂ひて突そんしける。折から寐すの番。行燈の油つき足さんと来るゆへ手早く懐釦とりかくし。酒一ッたへんま、爛して給へと望けるに不寐の若い者ハ銚子携へ座敷を立ハ。又々死んと思ひしか。紅か死顔を見れハ見るほときみわるく。其上取前突そんせし。咽の痛つよく。今ハ中々死氣も失しかきほとひて咽をつ、み此場を何卒立退んと。心遣る其折から。門の戸けわしく打敲。奥座敷へ舟宿よりの迎来りけるに。大勢一座の客一群に帰る様子なれハ。是幸身拵して。其中へまきれ入。早々立出我家

へ帰りける。橋本やにてハ夜明て是を見付。夕部の客ハ何某様。茶やへ人を走らせ茶やよりは客の方へ人を遣し届けるに。屋敷にてハ何某は夜前出奔のよしを答へけれハ。詮方なく。請人人置方へ紅か死骸ハ渡しけり。然るに何某ハ⁶人をあやめし身なれハ。世を忍ふ身のたつきなく。旦那寺へ至りてかしらを剪煩惱即菩提と容を替。世に墨染の姿にて。雲中子と改名して近郷近在修行しける月日に関もあらされハ。けふと暮昨日と過て。ほとなく件の女郎の一周忌になりける。其日ハ千住の在迎へ修行に至りけるに。賤しき家居より。老女たち出。心さしの日なれハ手の内しんせまいらせんとこなたへはいらせ給へといへハ。忝しと内へ入其時老女茶を汲差出し。今日はこゝろさしの候へハ。日暮も近くなりまいらせしま。御宿の御心あてもなく候は御宿申さふらはんと。いと念比にもてなしける。雲中子ハかたしけなしと。いと念比に謝し。舄鞋ときて休息なす内。老女ハ仏間へ燈明ともし。御廻向あれと⁷云にまかせ。雲中子ハ仏間に向見てあれハ。刃誉妙鍛信女と戒名あり雲中心に思ふハ。いかなれハ去年の今日今日ハ。女の刃に死る日ぞ。橋本やの紅も今日ハ一周忌此家の仏も一周忌このやの仏もいかなる因果に艱難にて死したりけん。いふかしさよといと、哀を催して。しやしこをならし念仏となえ廻向をなせは。いつくともなく女の声にて念仏す聲きこへけるま。不思議におもひ振返りて見れハ。去年死し紅におもかけ似たる女。雲中か後に居共称名唱けるにぞ。雲中ハ膽消魂飛心地にて。能々見れハ姿ハ田舎の女ながら顔ハ過つる紅なり。いと恨しけに雲中か顔打詠。扱うらめしきぬし様や。御見忘なされしか。みつからハ紅か妹にて。幼ときハにしきとて橋本や⁷に雇禿をつとめ侍りしか。後故郷へ帰居しに去年のけふ姉

様ハ客に殺され給ひしと。告来りしに悲の泪 腸を断。何の意趣にて何者に殺れ給ひしと。様子を聞ハ何某とかや云し客と聞とひとしく無念の泪我身おとこの身にしあらハ敵をうたて置へきかと思ふに甲斐なき女の身母様に力をつけよふく月日を送るうち。こよひ不思議に御宿申と云事も廻る因果の車の輪。むかしの姿にましまさハ。我身女のみなりともいたし方も有へきに。御姿もかへ給ひ仏の道に入給へハ今ハ恨もつき弓の。矢たけ心も墨染に。御身をかへさせ給ふ上ハ。よきに御廻向くたさるへしさるにても母人には。其事もしらせ給はぬ事なれハ。御心置なく終夜亡あね様の⁸御廻向を御つとめくたさるへしとてあやしの調度と、のへて其夜をあかし。又々修行に出にける

三浦や総角新造へ教訓の事

今ハむかし。三浦やの総角ハ。海内の名娼にして。五代目の高尾を出せしせんせいの君なり。ある時新造へかたつていわく。遊君のせんせいにならんとおもわハ。よく人の心に叶事を心にかくる事なり。オ一夜は寐る事なく。其上客のいね給ふをこよりなとして耳鼻をこそくりおこし。其人の好給ふ咄なそし。又ハ香道茶湯或ハ哥はいか⁹。い。琴三絃なそよく心かけて。知りたるていあまり顔に出さす。初會に来り給ふ客なそハつきなきものにていね給ふ時にも。女郎の来るを待遠くおもひ。或は狸寐入をし給ふ者ま、あり。誠にいね給ふとおもひ。外々の座敷へ遊びあるき。上るり小唄おとりなどに我を忘おそく座敷へ来りし上を。長くとはこをのみたるていに御客は狸寐も今はあたとなり。まし／＼としておきもやら

す。又八帰かけにも。はしこの口までよふく送りながらわきをむいて居てのあいさつ其上若い者の門口を」⁹ 出給ふ客を出すやいなや。からくどく、りをしめびんとおろしたる夜更の錠の音も又すけなく義理にも二度とこられぬしかた是などの心を能おもひやり。とりあつかうへき事なり。客の帰給ふ時ハ其行方をおもてまで出てじつとうしろをみつめいるおりハ。おもてまで送られしに心よく。ふりかへり見れハ女郎の立姿に心うかれて。帰給ひても目につく思ひにて。ほとなくうらに來給ふものなり人のつたなき事を云ても。ていよくとりあつこふ事也。或人のはなし給ふにハ。太夫部屋持新造の駒」⁹ 下駄の音に。見すしてそれく聞わけ給ふ。太夫女郎の駒下駄の音は。おのつからひやうしありて。からりくからりく。ほとよくあゆむ音おなしうしてやまず。しせんと其かたち見ることく。部屋持女郎ハからりく行てハとまり。からりく行てハ音おなしからす。新造ハた、からくど色も拍子もなく行なり。かやハかくる、と詠せしことく。闇の夜に梅花さかりをしるかことく。おなし流にすみながら。はずかしきものにそありける。又女郎に我とおもはぬ拙きかたちあり心得たし」¹⁰ 御客を送りて。はしこの下へおりながら。暇乞して御客のふれんを出給ふをまたすして。ばたくくどは草りの音つよく。二階へ上りたる。拙きしかたには。又來る人の道をうしなひしま、あり。しかはあれとも。おさへところなきものゆへに其身もしらすして。わかま、に心を持って。同しつとめの身とのみ心得てくらし。年の明るにて。まはり女郎にておいつかはれ。ほうはい女郎にあけらる、も。はずかしきをしらす年明て片付てもしこき帯をつねとして。夫婦さしむかいの暮しに。くるしき」¹⁰ 事を見るめさへいやましくおもふなり。

是に引かへ。座敷持女郎の心遣ひハお、かたならず。いやとおもふ事。顔へ出さす。或はすいつけたはこまてに心をつけ。連の御きやく外の女郎。中宿。茶や船宿。藝者。下女下男まての心をつけ。紋日物日もの前は苦のたままなく。借金のふち深く。かくまてにやるせなき身も。太夫女郎座敷持。部屋持も。それく上と中とへ片付行そかし。まことに公界の身の本意なるへけれ。我もなを御客の心をよく知らんと。たへす心かくるに。ある朝中の町の茶やに遊ひ居し折から。雨しきりに降」¹¹ 出し。折から二丁目のかたより。軒つたへに來り給ふ。御客のともとでもなく。茶や舟宿もなく只ひとり。雨具のよふるもなけれハ。手拭にてかしらをつ、み。裾まくりて雨もやまねハ。ひしよくとあちらをつたへこちらをつたい來り給ふありさま。いときのとくにもいわんかたもなく。かゝる姿にてハかへられましと心ならすみるうち。ほとなく大門へ出給ひてハ。甲斐く敷羽織をた、みてくわいちうし。もすそをからけはきものぬきてこしにはさみ。はしり行給ふてい。はしめの姿にことかはり。いとおかし。青楼のうちにてハ色をふくみ。其所をはなれてはじめけしき」¹¹ ハ。人の心そかし又朝かへり給ふ御客の道すから遊ひの噂し給ふをきかまほしくおもひて心得し人にとひけるに我も此事心つきたりと咄しけるハ。朝かえり給ふ御客の。三人四人つ、。上中下の人の遊ひの咄も又。定木をかけたることくかわりあるなり。上の人ハ。酒をすこし給ふ事。たいこ藝者のおかしき事のみをはなして。其夜の女郎の噂をいはず。中の人ハ。江の嶋目黒の土産ものを買寄て。いつつけに居たる事のみを咄つ、行ハ。むすこていなり。又中の内にも中の下あり。茶や女郎の意氣地しうち悪敷」¹² 事。あるハ座敷夜具などこしらへしはなし。又ハ。ねころし

にしてかえりたる事。一二所三所遊びあるきしを手柄に咄すてい。
下の人の咄しにハ。其夜の女郎にふられたると云。もてたると云て。
高くと下かゝりの咄して行も。六七町にハ過す。はずかはしきも
のハ人の心。たとへバ傾城にかきらす。よきかたによりたきものぞ
かし。色も香も知る人ぞ知と詠し哥の心も実その心一ッにあるべけ
れと。終夜その新造へつねくにおしへける

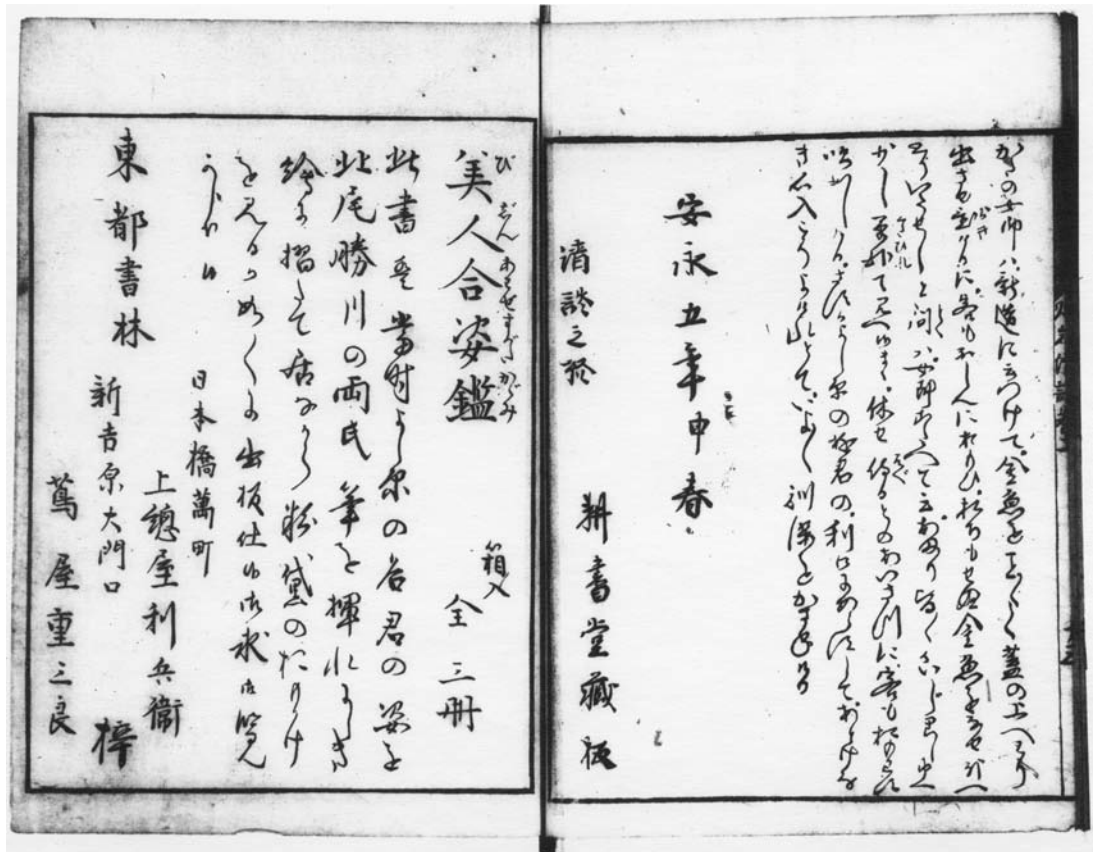
巴や薰弄金魚事^{12ウ}

今わむかし。江戸町巴屋に。かほると云る遊君あり。一たひ笑ハ。
人の國をも傾くと云けん。倂にもかよひて。見ぬ唐毛嬙西施
はいさしらす。時めきける。有様又たくひなし。或日馴染の客來りて。
其比流行しらんちうと云。金魚を四ツ五ッおかもちていの物に入。
水舟をしつらはせ。水石を弄ハ炎暑を忘れるに能けんとして。持せ
來りけるを。かほるをはしめ。新造禿茶やの娘をにいたるまで。金
魚にかゝりて。客の方を後になし。たはこの火或ハ酒の爛にもかま
ふ者なく。金魚の船を取まはし。詠居けるゆへ。客もあまり座敷
のてれるゆへ。新造の後より我かもたせ來りし金魚をのそき見るに。
我かあい^{13オ}かたの女郎ハ。新造に云つけて。金魚をことく蓋
の上へとり出させ置けるに。客もふしんにおもひ。おちもせぬ金魚
をなせ外へとりいたせしと問ハ。女郎こたへて云。あまり皆くか
いじりしゆへ少し草臥て見へ候ま。休せ侍るとのあいさつに。客
もおもわす吹出しける。さすかよし原の遊君の。利口にあらすして。
あとけなき心入こそよけれとて。いよく馴染をかさねける

安永五年申春

〔艶花〕清談之終^{13ウ}

耕書堂藏板



美人合姿鑑

箱入 全三冊

此書は當時よし原の名君の姿を北尾勝川の両氏筆を揮れにしき繪に摺たて居なから粉黛のおもかけを見るか如くに出版仕候御求御覽可被下候

日本橋萬町

上總屋利兵衛

東都書林

梓

新吉原大門口

葛屋重三良

後表紙見返

美人合姿鑑

箱入 全三冊

此書を考射ししるの名君の姿を北尾勝川の両氏筆を揮れしき繪を摺たて居なから粉黛のおもかけを見るか如くに出版仕候御求御覽可被下候

東都書林

新吉原大門口 上總屋利兵衛 梓

葛屋重三良